
ベルの狩猟日記 2

P 琢磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベルの狩猟日記2

【Nコード】

N7615E

【作者名】

P琢磨

【あらすじ】

この物語はモンスターハンターのファンフィクションです。【ベルの狩猟日記】の二話目に当たる作品なので、一度【ベルの狩猟日記】の方にも目を通して頂けると幸いです。拙い部分も多いと思いますが、良かったら最後までお楽しみ下さいー(・)ー(・)ー

00・前書

この物語は『モンスターハンター』の二次創作作品です。『モンスターハンター』の世界観や設定を、P琢磨が独自の解釈で綴った物語なので、至らぬ所が多々ありますが、お楽しみ頂けたら幸いです。なお当作品は、『モンスターハンターポータブル2G』を元に製作致しましたが、独自の解釈に基づいているため、『モンスターハンターポータブル2G』の仕様にはない事柄も出てきます。何卒ご了承ください。

また、この物語は【ベルの狩猟日記】の続編になります。先に【ベルの狩猟日記】を読了される事を推奨します。

00・前書（後書き）

初めての方、はじめまして。

【ベルの狩猟日記】などのP琢磨の作品から訪れた方、お待ちせしました、新作です。

今回も前話同様、毎日更新していきたいと考えているので、最後までお付き合い頂けたら幸いですー（・ー）（・ー）
感想や指摘など、お待ちしております！

01・咆哮【ベル】

狩人と呼ばれる人種は、得てしてマトモな人間は少数なのかも知れない。

そう思う理由は幾つか挙げられるが、例えば一つ意見を述べてみよう。彼らは自身の命を賭して、人間の何倍もの大きさの巨躯を持つ、且つ人間の何十倍もの膂力を誇る化物に対し、少人数、或いはたった一人で狩獵を行う。そんな最大級の危険が伴う、常に死が隣り合わせと言う事実が、一般人の観点では、正常な精神で依頼を全うする事自体が難しいのではないかと考えさせられる。

ただ、彼らには相応の見返りが用意されている。富、栄誉、名声……何より、モンスターを討伐・捕獲する事によって、喜び、助かり、感謝する民が大勢いる。中には、富や栄誉、名声を得るためだけにハンターになる者もいるが、結果が約束されている世界ではないので、多くが志し半ばでハンターの世界を去って行く。

それらを鑑みると、現役で活動しているハンターと言うのは、一概にそうとは言えないが、頭の螺子が弛んだ、死が隣に同居し続けたも意に介さないような者ではないだろうか。

ラウト村に居着いた村専属のハンターも、恐らくと言うか絶対そうという者だろう。その中の一人である少女のハンター、ベルでさえ、そう思わずにいられなかった。

「ザレア！！ ちよつと話が在るんだけどいいかしら!？」
辺境にある小さな集落、ラウト村。規模は村と呼ぶのも烏滸がましい程に小さく、民家の数も二桁に到達しない。森林が周囲を取り囲み、静かな朝の気配と僅かな冷気が辺りに満ちていた。聞こえるのは、枝葉が風で揺れる音と、小鳥の囀り、そして ベルのモニター染みた咆哮だった。

ラウト村の南に位置する小屋の前で爆発した少女の怒声は、狭い村の全域に響き渡る。近くの木々から小鳥が慌てふためいて飛び立

つ音が山彦のように返ってくる程の音量に、小屋の中にいた人間が驚く様が、見ずとも音で知れた。隣の小屋からは「ティガレックスが現れたのか？」と寝惚けた声が聞こえてくる。

丸太を組み上げた頑強そうな壁に、塗炭素材の斜に構えた屋根、鍵の無い木製の扉に加え、決して大きいとは言えない規模で、長屋風に四つの部屋が横に連なって建てられていた。ラウト村に腰を据えるハンターのために設けられた居住施設なのだが、どう考えても単なる小屋にしか見えない。その扉の一つが、恐る恐る開けられる。「な、何か用かによ、ベルさん……？」

現れたのは、大きなネコの頭。アイルーフエイク と呼ばれる頭を守る防具の一つだが、見た目はネコの顔を象った被り物としか言いようが無い。ネコに似た獣人族アイルーの頭をあしらった物で、一種異様な大きさと、笑っているようで無表情な顔が不気味だ。マスコットにしては悪趣味よね、と小屋の前で怒声を張り上げた少女

普段着姿のベルフィーユ、通称ベル は、何と無しに思った。それはともかくとして、扉を開けて恐る恐る現れた、ネコの被り物をした、服装が胸と股を隠す程度のインナーだけの少女ザレア。彼女の表情は読めないが、ベルには容易に彼女の心情を汲み取れた。突然の怒声に怯えている。ベルは別に読心術を会得している訳ではないが、ガタガタと小刻みに体を震わせてネコの被り物の口許で「あわあわ」と手を彷徨わせる様は、どう見てもそれ以外の感情を窺わせない。

ベルは努めて冷静になり、怒鳴りつきたい本能を押さえつけると、「えつとね、」と顰めた眉を掻きながら告げる。

「あんたは、村に、一体どれだけの爆弾を置いているのかしら？」
「爆弾？ 大タル爆弾Gなら、今、造ってる奴を合わせたら、全部で五十四個になるにや」

朝の麗らかな陽射しを浴びながらも、ベルの胸裏は完全に闇に落ちた。その場に四つん這いになり、体を震わせ始める。陽光を浴びていると言つのに、白と青を基調とした清潔そうなシャツは、どん

よりと曇っているように映った。

ベルの突然の訪問と理解不能の仕草に、ザレアは困惑しているようだった。　　が、すぐに打開策を思いついたようで、細い指を固めて拳を作り、掌の上にぼんっ、と下ろした。

「ベルさんも、爆弾が欲しかったのにやっ？」嬉しそうに明るい声で尋ねるザレア。

「ちツツがアアアアうー！」

爆音のようなベルの怒号が村中を駆け抜け、ザレアの隣の小屋から「まさかの異常震域か？」と寝惚けた声が再び聞こえてきた。

ネコの被り物の耳の辺りに両手を添えて堪えていたようだが、それでは意味が無いだろ、というツツコミは耐えて、ベルはザレアに詰め寄った。

「あんたねえ！　そんなに爆弾を造ってどうするつもりなのよ！？」

しかも自分の部屋だけならまだしも、村に野晒しってどういう料簡よ！？　しかも全部大タル爆弾Gだし！　あれが全部引火したら、こんな小さな村、塵一つ残らないわよ！」

一気に捲くし立てて憤るベルだったが、ザレアはその件に関してだけは全く怯まなかった。寧ろ胸を張って応じる。

「大丈夫にや！　爆弾に信管は無いし、衝撃を与えない限りは爆発しないにや！」

「衝撃を与えたら村が一つ消滅するのよ！？　何とかならないの、アレ！」

ベルが指差す先には、村のあちこちに点在している大きなタルの群れがあった。その量は、確かにザレアが言っただけは在りそうだが積み上げられる事は無く、全て地面に直に置かれて並んでいる。まるで酒樽のような趣があるが、中身が全て爆薬だと分かれれば、神経が休まる余地など絶無である。

そこに、

「朝から何を騒いでるんだ？　さっき、ティガレックスの咆哮が聞こえた気がしたけど、襲撃でも受けてるのか？」

隣の小屋の扉が音を軋ませて開き、奥から寝巻き姿の少年が現れた。白のノースリーブシャツに、赤錆色の半ズボン姿の少年は、大きな欠伸を浮かべながら、二人の少女の許へと歩み寄る。

すると普段着　白と青を基調としたシャツに、白のミニスカート姿のベルが怒りの形相で、穏和そうな少年に詰め寄り、ザレアを指差して怒鳴り散らす。

「フォアンも聞いてよ！　ザレアったら、この村を空の彼方へ吹っ飛ばそうとしてるのよ！」

「遂にラウト村も大空に進出という訳だな。心なしか心臓が高鳴ってる気がするぜ」空を見上げて胸の辺りを掴むフォアン。

「空に進出する前に村人全滅よ！　心臓の高鳴りは村中を大量の爆弾に包囲されてるから！」両手を広げて、辺りに雑然と並んだ爆弾を示すベル。

「そうにやよね、大量の爆弾に囲まれていると、不思議と心臓が高鳴る……これが、恋って奴なのにあ！」陽気な感じで、楽しそうにはしゃぐザレア。

「恋慕じゃなくて恐怖を懐いてるのよ常識で考えて！」だんだんつ、と地団駄を踏むベル。

「爆弾が大量に置いてあっても、そう簡単に爆発しないんだろ？」

「なら、問題ないじゃないか。さあ、朝ご飯を食べに行こう。俺もウスタミナゼロで走る気力も無いんだよ」腹を摩りながら虚ろな眼差しで酒場を見つめるフォアン。

「普通に歩きなさいよ！　じゃなくて！　すぐ爆発する訳じゃなくても、危ないでしょ！？」こんな状況で安心して眠れる訳が…

「……」
「……ぐう」

少年　フォアンが立ったまま鼻提灯を出して頭をコックリコックリ傾かせるのを見て、ベルは思わず脱力、そのままその場で再び四つん這いになる。

「……この話を聞いて尚、立ったまま眠れるあんたは、心底肝が据

わってるわよ……」言つて、ゆつくりと立ち上がるベル。「……この調子じゃ、あたしが何を言つても無駄みたいね……はあ、不眠症と過度のストレスでノイローゼになりそうだわ……」

ぐったりしているベルの肩にほん、と手を置かれる。顔を上げるとフォアンが微笑を浮かべていた。

「眠れない時はいつでも呼んでくれよ。眠くなるまで遊ぼうぜ」

「……ありがとう。あんたの事だから他意は無いと思うんだけどね、そう思うのなら、あの爆弾を撤去するのを手伝ってほしいんだけど……」

「そんな事したらザレアが可哀想だろ？ ほら、ティガレックスにでも囁まれたと思つて、諦めて朝ご飯を食べに行こうぜ」酒場を顎で示し、返答も聞かずに歩き出すフォアン。

「……ティガレックスなんかには囁まれたら即死よバカー！」

フォアンの背中に大声で罵詈雑言を浴びせかけるベルだったが、彼は意にも介さず歩を進めて行く。その後ろ姿を追うように、ザレアが小走りに駆けて行く。

「ベルさん、何してるにや、置いて行くにやよ？」振り返りながらも足を休めないザレア。腕を回して「早く行こう」と仕草でも伝えてくる。

ベルはそんな二人を見送りながら、大きなため息を漏らす。陽光に照らされたベルの顔には、既に疲労の色が濃かったが、肩を竦めて二人の後を追いつつ始めた。

今日もラウト村は賑やかな朝を迎えたのだった。

01・咆哮【ベル】（後書き）

序盤もそうですが、今回は狩猟よりも日常的なシーンが多いかと思
います。

以前よりもドタバタ感が出せていればいいなあ、と思います。

02・武器はいずい

「そういえば」

ラウト村にある酒場は非常に小規模な店舗だった。

樹木を切り出してそのまま加工したようなテーブルが三つと、カウンターの席が在るだけで、入れる客は多くても十五人が限度。真新しい感じのする木造建築の建物で、街などの酒場とは違い、まだ酒や煙草タバコ、そして人いきれのするハンターの匂いが染みついておらず、森の匂いとも言うべき青臭さが仄ほかに漂っている。店内は清潔に保たれており、埃ホコリや虫の存在は絶無ぜつむに映る。

それもそのはず、客と言っても村専属ハンターの三人が使う以外は、村長、そして村専属の鍛冶屋かじや位しか訪れる事が無い。故に、汚れる、と言う事自体が少なく、掃除をしなくても、ある程度の清潔は保たれるのである。

とは言え、その事を給仕の女性に言えば不興ふきようを買うのは必至だ。彼女とて、毎日掃除は欠かさず行っているのだから。流石さすがに食事中に掃除をしている場面を見る事は無かったが、ラウト村に来てからハンターの三人は何度か掃除を手伝わされた。曰いわく、村に早く馴染なじむためには、村人との交流が必要だ。とは給仕の弁べん。

「そういえば……何だ？ ベル。あの給仕のお姉さんの名前を聞きそびれて呼ぶに呼べない、とか？」

ベルの中途半端な発言を継いだのはフォアンだった。サイコロミートのステーキを次々に口の中へ投入しながら、ベルを見据える。ベルはと言えばスネークサーモンのソテーの一切れをフォークで刺して空中で静止させたまま、口だけを動かす。

「いやまあ、確かにそれもそうんだけど……。あんた達は、前に使ってた装備品って、どうしたの？」言い終えてから、スネークサーモンの一切れを口の中へと運ぶ。

ベルが美味しそうに咀嚼そしゃくしていると、ザレアが小首を傾げた。ザ

レアの前に置いてある皿の上にはジャリライスと激辛ニンジンの炒飯^{イハン}が置かれている。それをスプーンで掬^{すく}い取り、ネコの被り物の中に運んで行く。食事の時もそうだが、彼女が入浴の時もネコの被り物を外さないのは、最早彼らの中では日常と化していた。

「どうしてるって、どういう事なのかにや？ オイラの武器にやら、部屋に置いてあるにや」

「俺も、昔から使ってる奴は取ってあるけど。ベルは違うのか？」

サイコロミートのステーキを平^{たい}らげて満足気に息を漏^もらしてから、フォアンはベルに尋ね返した。

ベルも料理を腹に納め、満足気に「美味しかった」と顔を綻^{ほころ}ばせてから、少し表情を曇^{くも}らせる。特に隠すような事でもないが、自然と声が潜^{ひそ}められる。

「……いや、そのね、あたしラウト村に来る前はちよつとした規模の街で活動してたのよ。流石^{さすが}にドンドルマ程の街じゃなかったけど……ってそこは別にいいのよ。その街の拠点にしてた部屋に装備品が預けっ放しになってたから、知り合いの行商人に頼んだのよ。預けてある装備品を全部ここ　ラウト村まで運んで頂戴^{ちやうだい}、って」

「オイラもそうしたにや。でも、オイラのはもう届いてるにやよ？」
「俺も右に同じ。ベルのは、まだ届いてないのか？」

フォアンの質問に、ベルは俯^{むつ}いて顔を曇^{くも}らせる。「……そうなのよ。流石にもうこの村に来て二週間経つし、カジキ弓だけじゃ心許無いなあ、って思う訳よ。……まさかとは思うけど、」

あの馬鹿、あたしの高価そうな装備品を見て、持ち逃げしたんじや……と続けようとしたベルを遮^{おさえ}って、フォアンが真剣な表情で腕を組み、自分の意見を口にした。

「もしかしたら、モンスターに襲われて立ち往生^{たっちようせい}しているのかも知れないな。ラウト村に来る時は、どうしても狩場を通らないといけないし。二週間前にドスランポスとイヤンクックのつがいを討伐したに加えて、ランポスやブルファンゴを間引きしたって言っても、ランポスやブルファンゴ程度ならまだウヨウヨいるだろうし、もし

かしたら別の飛竜が棲みつき始めたかも知れないしな」

大きなネコの被り物を大きく揺らして頷くザレア。「確かに、そうかも知れないにや。この辺は何かと物騒だしにや」
「突如として椅子を倒して立ち上がる。「こうしちゃいられないのにや！ フォアン君、ベルさん、早速、森丘に行こうにや！」

「ちよつ、まだそうと決まった訳じゃ……」慌てて宥めようと手を挙げかけるベル。

「まあまあ、いいじゃないか、ベル。この村までの行路を少しでも安全にするに越した事は無いぜ」

フォアンが立ち上がりながら告げるのを聞いて、ベルは本日二度目のため息を漏らした。こうなるともう二人を止められない。後は自分が頷くしか道が残っていないのである。この展開は、出逢ってから二週間で三人の中に完全に確立したものだだった。

ベルは嘆息した後に微笑を浮かべ、二人のハンターを見据えた。二人とも、既にやる気が満タンの様子だった。例え、ベルが肯定の意を述べなくても、彼女を置いてでも行ってしまっただろう。

ベルは観念したように小さく顎を引き、立ち上がる。

「分かったわ、それじゃ、十分後に村の入口に集合。いいわね？」

「了解です、隊長」フォアンが敬礼し、「分かったのにや！」ザレアが拳手して応じる。

そして三人は酒場を後に

「皆さん、何か大事な物をお忘れではありませんか？」

酒場の出口に差し掛かった直後に背中から声が掛かった。三人が一樣に振り返ると、ニッコリと営業用の笑顔スマイルを浮かべた給仕の女性がこちらを見据えていた。その右手が持ち上がり、親指と人差し指が円を作り出す。

「あ、やっぱダメですか？」媚びるような笑みを浮かべるベル。

「はい、勿論ダメですよ」金獅子ライオンのような気迫を感じさせる笑顔を浮かべる給仕の女性。

ベルは頂垂れ、フォアンとザレアは顔を見合わせて微笑を浮か

べるのだった。

幾^{いく}ら村専属のハンターとさえど、無料でご飯にありつける訳ではないのである。

02・武器はいずこ(後書き)

引き続き日常シーンです。

無銭飲食は勿論ダメ絶対。

その割には集会所でどれだけ酒を飲んでも金払いませんよね、ハンターって。

あの辺の設定がどうなっているのか、未だに疑問です。

03・アイルー語

森丘、と称される狩場フィールドは、今日も空気が澄み渡る程の晴天に見舞われていた。

今回、三人は、『素材ツアー』と言う名目で森丘を訪れていた。以前から、増え過ぎたランポスやブルファンゴを間引きしに來たり、特産キノコや厳選キノコげんせんなどを採取しに來たりと、数日の間に何度も訪れているので、地図が無くとも自分がどこにいるのか、大体ではあるが、分かるようになっていた。

現在、三人のハンターが歩いている狩場エリアは森林地帯の奥深くだった。頭上を枝葉がアーチ状に包み込んで陽光を遮かくっている場所で、少し薄暗さが目立つが、視界が悪い程ではない明度で保たもたれている。あまり広い場所ではなく、大型モンスターに突進で襲われれば、回避するのが困難に違いない。静かな場所で、枝葉が風に揺れる音の他には、三人のハンターが歩く、地面を踏み締める音ぐらいしか聞こえない。

「で、ザレア。人探しの当てが在るって言うのは、どういう事なの？」

普段着から着替え、ピンク色のしっとりした銃士用ガンナーの防具フルDシリーズで、頭以外の全身を固め、カジキマグロの骨から造られた弓を限界まで強化した物である、カジキ弓【姿造】を背負って前進していたベルが、前方を軽い足取りで進むザレアへと声を掛ける。銃士用ガンナーの防具なので防御の面では心許無いが、装備品の軽量さでは剣士用の装備の比ではない。頭具は単に彼女の意向で付けていない。

声を掛けられたザレアの方はと言えば、村にいた時と同じで、防具はアイルーフェイクだけ。後は防具になるはずも無いインナーのみと言う、殆ど裸ほとんと言って差し支つかえない状態である。村と唯一違う点が在るとすれば、正式採用機械鎧と呼ばれる、回転式弾倉の

拳銃の弾倉シリンダーを巨大化して、更にそれに柄えを付けたような形のハンマーが腰こしに提さげられている事だろう。

そんな裸も同然の姿のザレアは、振り返りもせず、声だけでベルに応じる。その声は僅わずかに喜色を帯び、歩を進める仕草もどこか楽しげだ。

「オイラが一人で狩猟をやった時から友達がいるのにや。彼らなら、何か知ってるかも知れないと思っただのにや」

「友達？」ベルは小首を傾げる。

狩場フィールドに友達がいるなんて、常識で考えればあり得ないと思うのだが……。ベルは頭の上にクエスチョンマークを乱舞させながらも、ザレアの後に続く。そんな折、隣を歩いていた少年の興味深そうな声こゑが、ベルの耳みみを打った。

「どんな友達なんだろうな。やっぱり、ザレアみたいな奴がたくさんいるのかな？」

レックスシリーズの防具で身を固めたフォアンが何気無くしんが呟く。フォアンが背中に背負っているジャツジメントと呼ばれる斧きりぎりと、ティガレックスと言う巨大なモンスターの鱗うろこや甲殻こうかくで造られた褐色の防具こそが擦こすれる金属的な音を聞きながら、ベルは思考を働かせてみる。

ザレアみたいなハンターがたくさん……

ベル妄想開始

「大タル爆弾Gを造ったにや！」

「オイラも造ったにや！」

「オイラも造ったにや！」

「オイラもにや！」

「オイラも（ry）」

「オイ（ry）」

「（ry）」

ベル妄想終了

「……空恐ろし過ぎるわね……」
ぶるるっ、と身を震わせながら呟くベルに対し、フォアンは微笑を浮かべていた。

「そうか？ 楽しそうな感じがするけど」

「ザレアは一人で充分よ……あんなのがたくさんいたら、神経がどうにかなっちゃうわ」ぶるるっ、と再び体を震わせて、心底嫌そうに呟くベル。

「あ、いたにゃー！」

他愛も無い会話をしていた二人を置いて、突然走り出すザレア。

友達が見つかったのだらうか、その割にはベルの視界に人らしき姿は見当たらなかった。

「ザレア、どこにいるの、その友達って？」

のんびりと歩きながら後を追っていたベルだったが、ザレアの後姿に近づくと連れ、否応無く異形が視界に飛び込んでくる。

ザレアよりも二、三回りほど小さな影。それが人なら、最早幼児と言っても差し支えは無いだろう。ピッケルのような物を手に持ち、腰には道具袋と思しき小さな袋。服は着ておらず、白い体毛が全身を覆っている。頭の上にピンと立った耳と、頬からぴょんつと生えている白く長い髭。とととと小さな足を使って歩いている姿は、愛くるしさを覚えずにはいられない。

最早説明は要らないだろうが、ザレアの友達は人間ではなかった。

その名はアイルー　ネコに似た獣人族だった。

「にゃー」とアイルーの一匹が三人のハンターを見据えて喉を震わせる。鼻をひくつかせて、何やら一行の匂いを嗅ぎ取るうとしてい

るようにも映る。

見た目は愛らしい姿をしているのだが、その実、彼らは敵と見做した相手には爆弾を投げつけたり、ピッケルで殴りかかったりする。果ては、彼らに似たメラルーと言う名の黒毛の獣人族に至っては、ハンターの道具を盗んだりもする。ハンターにとってはあまり出逢いたくない相手だ。

とは言え、アイルーはメラルーとは違い、問答無用で攻撃してきたり、道具を盗んで行ったりする訳ではなく、基本的にはハンターが攻撃するまで何もしてこない温厚なモンスターだったりする。知能もあり、中には人語を解するアイルーもいて、人間の社会に溶け込む順応性も垣間見せる。

「やっぱり、ザレアと似たような奴だったな」

フォアンが腕を組んで「うんうん」と頷いているのを横目で見て、ベルは片手で顔を覆い、深々と嘆息を漏らした。

「似てるのは顔だけでしょ……。って、ザレア？ あんた、アイルーと友達なの？」

半信半疑と言うよりは、ザレアが言うからには事実以外にあり得ないだろうと、どこか諦念を漂わせた口調で尋ねるベル。そしてベルは、当然の帰結と呼べる、ザレアの嬉々とした首肯を見て頂垂れる破目になる。

「そうなのじゃ！ 彼らとはハンターになった頃からの友達で、今もお互いに助け合っている間柄なのじゃ！」

ザレアがアイルーの一匹に歩み寄って行くと、アイルーの方もザレアに気づき、鼻をひくつかせて顔を上げ、彼女の顔を覗き込むような仕草をする。ザレアはアイルーの目の前に屈み込むと、「にゃーにゃー」と声を掛けた。するとアイルーの方は突然の出来事に驚いたのか、跳び上がった。「にゃー！」と喉を震わせる。表情の機微こそ分からなかったが、ベルには何と無く、アイルーが驚きと共に、喜びも表現したのではないか、と考えていた。

その後も延々と「にゃー」と言う喃語のような声の応酬が繰り返されていく事から、どうやらザレアとアイルーの間では、ちゃんと

意志疎通が図られていたようだった。

「……アレは……ネコ語、なのかしら……」ポツリと漏らすベル。
「違うよ。きつとアレはザレア語だよ」

「ザレアは名前じゃなくて人種なの!？」

ベルとフォアンが他愛も無い会話を繰り広げている間に、ザレアがこちらに振り返って戻って来た。心なしか嬉々とした感情が見え隠れしている。

「ムサシ君の話に寄れば、隠れ家に人間が一人、迷い込んでるらしいのによ。もしかしたら、その人が……」身振り手振りを交えて告げるザレア。

「……あのさ、ムサシ君って、」話を遮る形で、ザレアの背後からこちらを窺っているアイルーを、ベルが怪訝そうに指差す。「そこアイルーの事?」

「そうにや!」コックリ頷くザレア。アイルーの話を振られて、嬉しそうに応じる。「この森丘ではベテランのアイルーらしいにや。」

今、息子さんが生まれて、働くのが楽しくて仕方ないらしいにや!」

「……そう」どう反応すればいいか分からず、生返事を返してから、「あのさ、さつき喋ってた言語って……ネコ語、なの?」気になる事を尋ねるベル。

「違うってベル。アレはザレア語だよ」だろ? とザレアに確認を取るフォアン。

「どっちも違うにや! 今のはアイルー語にや! 因みに、にやー、これがメラルー語にや!」酷く心外だ、とでも言いたげに、少し怒ったように告げるザレア。

「何が違うの!?!」思わずツツコミを入れるベル。

「それじゃ、にやー、はアイルー語で、にやー、がメラルー語なのか?」フォアンが腕を組んで難しそうに顔で呟く。

「凄いにや! まさしくそのとおりなのにや! フォアン君は呑み込みが早いにやあ……」腕を組んで、感慨深げに頷くザレア。
「オイラはこの言語をマスターするのに、五時間は掛かったにや……」

「……」
「どつちにしたって理解するの早過ぎでしょ！？ 何よ五時間って！？ フォアンも一瞬でマスターすんな！ あんたらは天才か！」
迷わずツツコミを入れるベル。

「そんなに褒めても、」道具袋ホーチからオレンジ色の液体の入ったビンを取り出して、ベルに手渡すフォアン。「元気ドリニコしか出ないぜ」

「……ありがと」釈然しゃくぜんとしないものを感じつつも受け取り、それからどつツツコミを入れたものか悩んだ後、結局は有耶無耶うやむやにする事を選ぶベル。「……えーと、それで、誰かが隠れ家に迷い込んだって……？ てか、そもそも、隠れ家って……何？」

「アイルー達の集落みたいなものにや。今、ムサシ君が案内してくれるみたいだから、付いて行けば分かるにや！」

そう言っただけでムサシが振り返ると、ムサシは胸を張って地面を掘り始め、瞬く間に視界から消え失せた。

「……何これ、あたしに穴を掘れと言ってるの？」フォアンに振り返って尋ねるベル。

「違っぜ、ベル。ムサシの後を追えばいいんだよ」腕を組んで当然だと言わんばかりに頷くフォアン。

「追っちは穴を掘らなきゃいけないでしょ！？」至極真つ当なツツコミを入れるベル。

「こっちにや！」そんな二人の漫才コントを聞いていないのか、ザレアが駆け出した。

「はい！？ こっちって……ザレア、ムサシの居場所が分かるの……？」ベルが半信半疑でザレアを追って駆け出す。

「違っにや。さっき、道を教えて貰ったのにや！」

「………そう」

やっぱり釈然としないまま、足を進めるベルなのだっ。

03・アイルー語（後書き）

アイルーやチャチャブーはまだ話が出来そうな気がするんです。あくまで私の中では、ですが。

アイルーは実際、人語を解する奴がいますし。

流石に飛竜種と意思疎通が出来たら、別の話になりそうですが・・・

04・真ベル

「ここが……アイルールの隠れ家、　なの？」

森丘の中にある、森林地帯の最奥とでも言うべき、奥まった場所に、ベル達三人のハンターは訪れていた。ここに来るまでに、以前ドスランポスを討伐した際に通った澄んだ水を湛えた池、その水源に続く小川を渡り、樹木に囲まれた、小さく開けた空間がぽっかりと現れた場所へと辿り着いた。

走った訳でもないのにベルの息が少し切れているのは、起伏のある足場を何度も上り下りした事と、ここまでの道程がかなり長かった事が起因している。ベルの隣に佇むフォアンは全く堪えた様子は無く、平然とした面持ちで周囲を見渡していた。ベルは「この体力馬鹿……」と小さく呟くも、フォアンの鼓膜に届いた様子は無かった。

ベルの独り言染みた罵倒が空しく口の中で響いていると、先頭を歩いてきたザレアがネコの被り物を振り返らせ、無表情そのものの被り物を震わせて両腕を広げて辺りを示す。

「そうなのじゃ！　ここが、彼らの隠れ家なのじゃ！」

ザレアが示す“アイルールの隠れ家”とやらは、随分穏やかな場所だった。ここに来るまでに何度と無くランポスやブルファンゴの襲撃を受けたが、小さな空間とは言え、モンスターはネコの獣人族

アイルールとメラルールしかいないこの空間は、時間が止まっているかのような錯覚を覚えさせる程に、温和な空気が満ちていた。

麗らかな日溜まりに浮かぶ朽ちた大木は、彼らの棲み処になっているのか、中が剥り貫かれていてようで、小さな木製の扉が設えられてあった。辺りにはネコに似た獣人族が小さな足を二足歩行でちょこまか動かして歩き回っている姿が映っており、普通に観賞する分には和やかな光景だった。

と、いつの間にかアイルールの何匹かがザレアに群がり、にや

「いやー喚き散らしているのが視界に飛び込んできた。ザレアは困った風でもなく、楽しげににやーにやーとアイルー語を一匹一匹に丁寧ていねいに返している。」

「……まるで有名人か何かね。自称 アイルー仮面 は伊達だてじゃない、か」

一人納得したように頷くベル。ザレアは根がマジメと言うか素直と言うか、普通に善い人なのだが……その奇天烈キテレスな外見が、周囲と孤立する要因となっていてるので、それさえ取り除けば、普通にハンターとしても人としても素晴らしい要素があるのに……それを勿体もった無く感じるのはあたしだけ？ とベルは思わずにいられない。

「なあ、ベル」
そんなベルの感傷を断ちきるように、フォアンの声が耳朶じだを打った。

ベルは我に返って斧剣を背負う褐色の防具に身を固めた少年へと振り返る。彼は隠れ家の隅すみに目を向けたまま、ベルに声を投げかける。

「アレが、例の行商人じゃないのか？」

言われて、ベルもそちらへと視線を向ける。

視界に飛び込んで来たのは、巨大な塊 大きな風呂敷がぎつしりと何かを詰め込まれて膨れふく上がっているために人の姿は見えないが、巨大な塊が小刻みに動いている事から、誰かが背負っている事は知れる。どれだけの量の荷物を背負っているんだ、と思うかも知れないが、この世界の行商人は、自分の二〜三倍ほどの量の荷物を一人で運ぶ。ハンター顔負けの体力を持っている者も、中にはいるのである。

ベルは「確かに、そうかも」と呟き、つかつかと巨大な塊へと足を向ける。目の前まで近づくと、荷物の量が自分の背丈を軽く超えている様を見ながら、その背中へと声を掛ける。

「ねえ、ちよつとそこにあんだ」

声を掛けて、暫しばらく待っても返答は無かった。モソモソと風呂敷

に包まれた荷物が震えるように動いているだけ。

ベルは少し眉に険を込めて、風呂敷の横へと移動する。

巨大な荷物を背負っているのは、果たしてベルが武器の運送を依頼した行商人に相違無かつた。

茶色の髪は全く梳かれておらず、鳥の巢の様相を呈している。細かい華奢な面構えや、線の細い体格から女性を連想させるが、紛れも無く男だった。小麦色の肌は日に焼けて健康そうだが、その割には肉付きがあまり良さそうに見えない。歳の程は二十代か、若々しさのある風体だったが、垂れ目気味の碧眼や、痩せた頬がそう見せるのか、その印象は老け込んだものを想起させる。若年寄のイメージが強い青年である。

行商人の男は、地面に乱雑に放置されているガラクタの山を漁る事に夢中だった。ガラクタの山を弄って目ぼしい品を取り出しては眼前まで持ってきて、その品を厳格に鑑定している、ように、ベルには映った。

ベルはその肩を叩きながら、「ちよつと、あたしの話、聞いている？」と少し険のこもった、低い声を発したが、男は無視して、と言うか気づいた素振りも見せず、ガラクタを見つめて瞳を眇めている。突然、ベルの怒りの沸点が破られた。男の耳元に両手を覆うように当て、大きく息を吸い込んで、耳元に声をぶち込む。

「あたしの話を聞けっ言っつてんでしょうがアアアアアアアア

ッッー!!」

突然の爆音ならぬ爆声に、アイルーもメラルーも全員跳び上がり、フォアンは耳を押さえて屈み込み、ザレアは見えない何かに吹っ飛ばされ、そしてその声を耳元で爆発された男は尻餅を着いて頭をくわんくわんと揺らし始めた。

頭をくわんくわんと揺らしている男の頬を、ベルが何度もばしーんっ、ばしーんっと張り手で打ちのめし、無理矢理覚醒させる。とてもいい音が、隠れ家一帯に響き渡った。ネコに似た獣人族は一樣に怯えた様子で、ガタガタ震えながらベルを見つめていた。

「おい、ベル。それ以上やると、そいつ死ぬんじゃないか？」

フォアンが堪り兼ねて、と言うよりは男の身を本気で心配して声を掛けたが、ベルの手は止まらなかった。

やがて青年の瞳に意識の光が戻る。と同時に、ばしーんっ、とビンタが炸裂し、「痛ッ」と悲痛な声を上げた。

が、ベルのビンタの猛攻は止まらない！

「痛ッ（ばしーんっ）、ちょッ（ばしーんっ）、起きたッ（ばしーんっ）、起きてますッ（ばしーんっ）、起きましたッ（ばしーんっ）、止めッ（ばしーんっ）、ごめんなさいッ（ばしーんっ）、本当にッ（ばしーんっ）、止めて下さッ（ばしーんっ）止めてマジで本気ホントホントマジ止めてマジ本気だからホントごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいッ」

ようやく往復ビンタが止まる頃には、男の頬はオタフクのように腫れ上がっていた。

「……で、ウエズ。あんた、こんな所で何してんのかしら？ あたしの武器はどこにやったのかしら？」ニッコリと微笑むベル。

ウエズ、と呼ばれた行商人の青年はズキズキ痛む頬を両手で挟んで涙ながらにベルを見上げた。その瞳には怯えが色濃く浮かんでいる。

「お、お前、よく見りゃベルじゃないか！ 何すんだよいきなり！

僕の楽しみを奪うだけに飽き足らず、僕を殴り殺す気か！？」

「殴ってないわ。張り飛ばしたのよ」ニッコリ笑顔のまま、ベル。

「じゃあ張り殺す気か！（ばしーんっ）痛エエエエ！ 止めッ、ちよッ本気で痛いのに！ 見てこの腫れ上がり具合！ こんな顔じゃ、もうお婿に行けない！（ばしーんっ）ぎゃアアア！ ごめんなさいッ、口答えしたわたくしめが全面的に悪かったですッ、全部謝り

ますッ、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいッ！」

額を地面に擦りつけながら懇願するウエズを見下ろしたまま、ベルはゆっくりと言葉を紡いでいく。ウエズの心に染み込ませるように、じつくりと、時間を掛けて。

「それで、ウエズ。あたしの、武器は、どこに、やったの、かしら？」

凍てつくような笑顔で尋ねるベルに、ウエズは最早顔を上げる事すら間々ならなかった。平伏したまま、引き攣りそうになる舌を駆使して、口上を走らせる。

「はいッ、誠に恐縮ながらッ、わたくしめがお預かりしている次第でありますッ」

「そう。で、二週間も経ったのに、どうしてあたしの許に届かないのかしら？」

「そッ、それはッ……」ガタガタと体を小刻みに揺らしながら、口ごもるウエズ。

「どうして、二週間、経っても、あたしの、許に、届かない、のかしら？」

噛んで含めるような言い方に、ウエズは観念したのか、鼻声になりながら応じた。

「僭越ながら申し上げますとッ、わたくしめが素材欲しさに、狩場に不法に長期滞在した事が原因かと思われまッ」

「そッ……」

背筋の凍るようなベルの声に、ガタガタと小刻みに震えて、次に発せられる審判に、怯えながら身を委ねるウエズ。

そんな様子を遠目に見守っていたフォアン、ザレア、そしてネコに似た獣人族の面々は、ベルの変容っぷりに暫し付いて行けない様子だった。そんな中でも、一つだけ、彼らにでも分かる事柄が在った。

ベルを本気で怒らせてはいけない。

それだけは確かで、そして絶対に遵守じゅんじゆすべき事柄なのだと、一同は暗黙の内に悟った。

04・真ベル（後書き）

引き続き日常のシーンが続きます。

狩猟どうした狩猟！

．．．今回は日常シーンがやたらと長いので、もう暫らく仄々としたシーンが続きます。

私の作品は概して前置きが長いのです、悪しからず！．．．！

05・行商人のウエズ

「ウエズさん！？ ど、どうしたんですか、その怪我ケガっ！？
もしかして、狩場でモンスターに襲われたんですかっ？」

「……いやまあ……これはその……何とも込み入った事情が在りまして……」

場所は変わり、ラウト村にある酒場。

『素材ツアー』に限らず、狩猟クвестを終えたハンターはまず、酒場に行つて依頼クвестの完遂、または失敗の報告をしなければならぬ決まりになっている。酒場はハンターが集まる場所になるだけでなく、狩猟などの依頼を受ける場となる事が常となっている。故に、ハンターが街に行くときまず向かうのは酒場で、そこでハンターとして登録して貰ったり、仕事クвестを幹旋あっせんして貰ったりする。

『素材ツアー』を終えたベル一行はラウト村の小さな酒場に戻つて来ていた。 目的の相手である、行商人の青年を保護………と言う名の強制連行をして。

頬がオタフクのように腫れは上がった行商人 ウエズを前にしておろおると手を拱こまねいているのは、ラウト村の若き女村長、コニカである。相変わらず雪のような白さの肌をしており、本当に外を歩いた事が在るのかと疑わせる。眼鏡メガネを掛けた、華奢きゃしゃさと穏和さが混在した、二十代ほどの女性である。

「あれ。村長。ウエズと知り合いなの？」

疑問に思ったのは、腫れ上がる程にウエズの頬を張り飛ばした少女、ベルである。既にビールを飲める歳だが、握っているジョッキに入っている飲物は、ハチミツの入ったホットミルクだった。それをテーブルに戻しながら、コニカを見つめる。

コニカは給仕の女性に向かつて、「ティアリーさんっ、医療キットを！」と声を掛けてから、ベルに向き直った。その時ベルは初めて、給仕の女性が“ティアリー”と言う名前だと知った。二週間も

顔を合わせているのに、今更な話ではあるが。

「えつと……、ええ、そうなんです。ウエズさんとはこの村を造った時に知り合っただんです。ここにはまだ、村専属の道具屋さんがいませんし、ハンターさんが来てくれたら困るだろうな、って思っただけで、ウエズさんに頼んだんです。行商人さんなので、あちこちを回る際に、ラウト村にも立ち寄って下さい、って。そしたらウエズさんに、快諾かいだくして下さい……とても助かっちゃってます。」

コニカが少し恥ずかしそうに告げると、ウエズも褐色の顔をほんのりと赤らめて「いやあ、そんなの当然の事っすよ」と照れたように後頭部を掻き始める。

「へえ、そうだったんだ」ベルは意外そうに瞳を丸めたが、すぐにウエズを尻目に、コニカへ向かって囁ささやきかける。「……でもね、村長。こいつ、あたしの武器の運送をほっぼって、趣味の素材集めに走っ　むぐぐ」

「わーわー！」喚わめきながら、ベルの口を塞ふさぐウエズ。「え？　ウエズさん、今、ベルさんは何て……？」小首を傾げて尋ねかけるコニカ。

「でもね、村長。こいつ、あたしの武器の運送をほっぼって、趣味の素材集めに走っ　むぐぐ、って言っただけだよ」フォアンが一言一句間違えずにベルの途切れた言葉を反芻はんすうする。

「ちょッ、君も何を冷静に復唱してるんだよッ！？」驚おどきと焦りで喚わめき散らすウエズ。

「趣味の素材集めにはしつ、ってどういう意味にや？」理解できない様子で、ネコの被り物を傾かせるザレア。

「そ、それは……」趣味の素材集めに走ったりせず、ちゃんと最後まで仕事を全うまっくした』、って言いたかったんですよ、きつと！　いや絶対！」

必死になつて弁解するウエズに口を塞がれたままのベルは、顔を赤くして「むぐぐ！」と声をくぐもらせていたが、やがてその拳が、渾身の一撃を伴ともなって彼の鳩尾みぞおちを穿うがった。

「うげえつふツ。……べ、ベル、ハ、ハンターは、人に向けて、力を使っちゃ、いけないんだ、ぞう……ぐふ」ぱたりと倒れ込んでしまおうエズ。

「だったら、そんなハンターにもつと敬意を表すべきよねえ？ ……
… 全く、こいつにも困ったものだわ……」

やれやれ、と蹲るウエズを見下ろして首を振るベル。

コニカがどうしたらいいのか困惑気味に「おろおろ」と視線を彷徨わせていたが、気にせずベルはホットミルクに口を付け直した。甘い匂いが鼻腔を擦る。

「まあ、いいじゃないか、ベル。武器はちゃんと届けられたんだし、結果良ければ全て良し、 じゃないか？」

フォアンが北風ミカンのジュースをテーブルに戻しながら、ベルに微笑みかける。全く邪気を感じさせない笑顔を見て、彼以上に裏表の無い人物は見た事が無いと、ベルは心底思う。とは言え、ウエズの件をそう簡単に許せない位、ベルは狭量だった。

口を尖らせつつ、フォアンに当たる。

「そうは言っても、二週間も放置して、あちこち狩場回って素材集めに走るなんて許せないわよ。……まあ、ウエズに頼んだあたしもあつだけどさあ……」

「そういえば、ベルさんとウエズ君はどういう関係なのじゃ？」

愚痴を漏らすベルを見つめて、フォアンと同じく北風ミカンのジュースを、常に持ち歩いているマイストローで吸い上げながら、ザレアが尋ねる。勿論ストローは、アイルーフェイクの中へと入っている。彼女は食事の時でもアイルーフェイクを外さない、根っからの変わり者なのだ。

ベルはザレアに視線を向けると、どこか遠くを見るような眼差しになり、苦笑を滲ませて口を開いた。

「ウエズとは単なる腐れ縁よ。あたしが小さい頃に、村がモンスタ―に襲撃された話をしたでしょ？ あの後、ドンドルマ程じゃないけど、それなりに大きな街に行ったの。そこでとあるハンターに拾

われて、暫らくの間、世話になった事が在るのよ。その、まあ、親代わりのハンターの行きつけの行商人の息子つてのが、そいつな訳よ」

簡単な説明だったが、関係を知るには充分過ぎる内容ではあった。その場に居合わせた皆が、納得できる程に。

「で、まあ、あたしがハンターとして活動を始めた時も、ウエズに道具を融通して貰ったりしてね。殆どは自分で賄ってたんだけど、どうしても無理な時はウエズ、みたいな感じで」

「……正直言つてベルは最悪の客なんだよ……どんな時でも値切りに値切つて、もう原価割れしてるつてのに、まだ値切りやがるから、もうこつちとしては商売上がったたり。そんでもって、逢う度にこうだし、散々な思い出しかないよ……」

いつの間にか起き上がっていたオタフクの顔をしたウエズが、本当に苦労したんだぞ、と暗に示すようにさめざめとした表情で呟く声が、酒場に響いた。

医療セットを持ってきた給仕の女性　ティアリイがコニカに手渡すと、村長はすぐにウエズの顔の治療を始める。ウエズはどこか嬉しげだったが、ベルに足を踏み碎かれると、無声の絶叫を張り上げ、唇を噛み締めて目尻に涙を浮かべながらも、何とか堪える。

「し、沁みましたか……？」

悶絶の表情を浮かべるウエズを見て心配げに、消毒液に浸した脱脂綿を顔から遠ざけるコニカ。ウエズは「いえ……ッ、大丈夫、です……ッ」と、硬い表情で唸るように応じるだけで、彼が顔を歪めた本当の原因を知らない彼女は、さっきよりも慎重にウエズの腫れ上がった顔に脱脂綿を近づける。

「ウエズって行商人なんだよな？　なら、どんな道具を持つてるのか、見せて貰ってもいいかな？」

治療中のウエズを見て声を上げたのはフォアンだった。ウエズはその発言に、一瞬にして気分を良くしたのか、ちよっただけ誇らしげに鼻を擦る。

「いいぜつ、僕の道具は、その辺の道具屋じゃ見られないような、珍しい物が豊富なんだぜつ」

「わあ、楽しみなのにゃ！」

ザレアが興奮気味に「わくわくっ」と手振りも交えて期待するのを見て、ウエズは治療を途中で止めて立ち上がり、酒場の隅に置かれていた大きな風呂敷を広げる。そこに集まるように、酒場にいた一同が足を向ける。

「さあさあ皆々様ご覧あれ！ ウエズ様特選の珍品名品の数々を！」

風呂敷に包まれていた品は確かに豊富だった。多種多様の虫の入った籠に始まり、大量のキノコ類、色取り取りの魚、生肉ではないが何か色の違う肉、そしてモンスターの素材と思しき、三種ほどの牙など。種類は多岐に亘り、量も半端ではなかった。

「へえ。流石に取り揃えは多いなあ。これって怪力の種じゃないか？ 食べると、力が一時的に湧いてくるって言う」

フォアンが風呂敷の上に在った小さな赤色の種を摘み上げて尋ねると、ウエズは我が意を得たり！ と言いたげに指を鳴らしてフォアンを指差し、嬉々とした声で応じる。

「流石はハンター、よく分かったな！ 一般人はともかく、ハンターでも偶に赤い種と間違えるってのに、一発で分かっちゃまったか！ その通り、それは怪力の種。砂漠で採取した、天然物さ！」

「こ、これは！」ザレアが手にしたのは、小さなデメキンのような灰色の魚だった。それを掴んだ手が震えている。「カ、カクサンデメキンも扱ってるのかにゃ！？」

「お、そちらの アイルーフェイク のお嬢さんもお目が高い！ そうとも、僕は魚も全般的に扱ってるのさ！ そのカクサンデメキンは最近立ち寄った沼地で釣り上げた、まだ新鮮な代物だよ！」

ウエズが水を得た魚のように得意気に演説染みた説明をするのを、遠目に見守っていたベルは、懐かしさと苦笑の混ざった嘆息を零した。

彼は昔から変わらない、そう思わずにいられなかった。

ウエズには商才があると、ベルは知っている。それは、彼の行動力や説明力の高さからも頷ける。だが、彼にも欠点が存在する。それは……

「お？ これって、傘、か？」

フォアンが風呂敷の上に置かれている、無色の傘を拾い上げる。

壊れている訳ではなく、普通に日常生活で使えそうな、何でもない代物に見えたが、ウエズは更に得意気になって舌を滑らせる。

「おお！ 流石は歴戦のハンター、目の付け所が違うね！ そうとも、それは落し物の傘！ なんと狩場で偶然見つけた逸品さ！」

「どこで見つけたんだ？ しかも狩場で傘って、普通はそんな物、落ちてないよな？」

フォアンの疑問に、ウエズは深く考えるでもなく、即座に回答を出す。

「この村の南西にある湿地帯で見つけたんだ！ 沼地と言えど、狩場は素材の宝庫だからね！」

「南西の湿地帯？ あそこって最近、ゲリヨスが棲みついたって聞いたけど、もう退治されたんだっけ？」 フォアンが小首を傾げて不思議そうな顔をする。

「うんにゃ、退治されてないよ。ゲリヨスの視線を掻き潜って、素材を集めて来たのさ。いやあ、あの時も危なかったなあ……最後はゲリヨスと死に物狂いの追いかけてこも繰り広げたし。だが、

それだけの価値が、この傘にはあると、僕は信じてるよ！」

酒場が一瞬にして静まり返った。

音の消えた酒場で、ウエズだけが「あれ？ 僕、何か変な事、言いました？」と笑顔のまま後ろ頭を掻き始める。

「……はあ。やっぱり治ってなかったか……」

ため息混じりに反応したのはベルだった。やれやれと肩を落とす、ウエズの顔を覗き込む。ウエズは何の事か分からず、笑顔のまま頭上にクエスチョンマークを浮かべている。

「ゲリヨスと追いかけてこって凄いな。死に物狂いって言うか、

ハンターでも命落とすかどうかの瀬戸際じゃないか？」感心するよ
うに、どこか感嘆した息を漏らして呟くフォアン。「よく生きて逃
げられたな」

「へ？」ウエズが笑顔を若干、引き攣らせる。

「ゲリヨスのパニツク走りや猛ダツシユは、ハンターでも追いつか
ない程の速度にやから、追いかけられたにやら、普通は潰されてる
と思うにや！」

追い討ちを掛けるように続けるザレア。だが何故か、アイルー
フェイクの中にある双眸は、憧憬の熱を帯びた光が輝いているよ
うな気がしてならないベル。

ウエズが凍りついた笑顔を張りつけたまま固まっていると、ベル
が憐憫の感情を色濃く浮かべた瞳で、彼の凍結した顔を覗き込む。

「あんた、いい加減、素材収集になると周囲が全く見えなくなる癖、
どうにかしないと不味いわよ」説教染みた口調で、ベルは同情の眼
差しを向ける。「行商人として素材が大切なのは分からないでもな
いけど、狩場に入り浸り過ぎると、いつか本当に命を落とすわよ？」
ベルの説教を聞いていたウエズは、顔を曇らせていたが、す
ぐに薄い笑みを滲ませた。無理矢理浮かべた、と言う訳ではなく、
どこか自然に漏れた苦笑と言った様相が強い、微笑だった。

「……まあ、これは僕の性分だしなあ。前からベルに耳にタコがで
きる程に聞かされたけど、こればかりはどうしようもないよ」

「馬鹿は死んでも治らないって言うけど、あんたがまさにそれだわ。
地獄でも素材を集めてなさいよ」

「辛辣過ぎる！　せめて死んだら天国に逝かせてくれよ！　死ぬ気
も無いけど！」

ウエズの悲鳴染みた絶叫が小さな酒場に響き渡った。

05・行商人のウエズ（後書き）

長い前置きはまだ続きます。

流石に読者がダレてくるのが目に浮かぶ・・・これホントにMHの
小説か？

ストーリー重視と思って頂けたら幸いですー（・ー（・）ー

06 半人前の行商人として

昼下がりに。ラウト村の酒場に、一人の青年が風呂敷を包み直す姿が在った。

何故か青年 ウエズは泣いていた。しくしく、と涙を流しながら荷物を纏めている。

「ぐす……また原価割れで素材を買われてしまった……酷いよう……」

「なに泣いてんのよ、原価割れなんていつもの事じゃない」

「だから泣いてんだよ!? もう完全に日常茶飯事にされてるから泣いてんだよ!?!」

酒場の隅で絶叫を走らせるウエズを平然と見返すのは、大量の道具や素材を手に酒場を後にしようとしていた少女、言わずもがなベルだった。キノコ類やビン類を大量に腕に抱え、落とさないように気を遣いながらウエズを見やり、表情同様、声音も平素そのもので応じる。

「? あんた何言ってるの? 逢う時はいつもこうだったじゃない」
ベルが特に感慨らしい感慨も浮かべないまま立ち去る姿を、その場で四つん這いになって絶望を感じて見送るウエズ。まるで彼の頭上に暗雲が立ち込めているように、その周囲だけがやたらと憂鬱な闇に閉ざされている。

そんな様子を苦笑しながら見つめるのはフォアンだった。彼もウエズからは幾つかの種類の道具を購入したのだが、既に家と言う名の小屋に運んだ後だった。

「ウエズも大変だな。まさかベルがここまで値切るとは思わなかったよ。流石にピッケルが十を切った時はどうしようかと思った」

「……結局、奴は七で十個も買っていったけど……僕が思うに、ベルの買物は、まさしく狩りだよ。奴は僕からピッケルを狩っていたのさ!」

よく分からない例えに、誰もが小首を傾げていたが、それには気づかない様子で荷物を纏め終えたウエズが風呂敷を担いで立ち上がった。

「ウエズさん、もう別の街へ？」

思わず立ち上がって悲しそうな眼差しを向ける白皙の村長　　コ

ニカ。

「折角なんですから、もう暫らく滞在していかれたらどうですか？宿もこちらで用意しますし……」

仔犬を連想させる、潤んだ瞳で見つめる美貌の女性に、ウエズは頬を赤らめながらも、首を振って断った。

「僕としてもここに留まって、コニカさんと色々な話をしたかったです……このように、専属の道具屋がない村を回らないといけないので、今日はこれにて失礼させて頂きます。他の村でも、このように僕の到着を心待ちにしているはずですから」

恥ずかしそうに、と言うよりは幾分の誇称が入っていたように思えるが、取り敢えずこの場にはそれを見透かせる者はおらず、テイアリイを除く皆が、感嘆の吐息を漏らしていた。

コニカは残念そうに、でもそれをできる限り表情に出さないようにしているのか、微笑笑をウエズに向けた。

「そうですね、この村以外にも、皆さんがウエズさんを待っているんですものね。無理に引き留めてはいけませんね。あまりおもてなしもできませんでしたが、またいらっしやって下さいね」

最後は満面の笑顔を浮かべたコニカに、ウエズは心を射抜かれたように「ふぐつ」と胸を押さえてたじろいだが、すぐに我に返って「では！」と大きな声を上げ、片手を挙げて酒場を後にした。

「で、次はこの狩場で素材収集に走るのかしら？」

「うおっ！？　べ、ベル！？　いたのか！？」

酒場の入口の壁に凭れかかるようにしていたベルが、半眼でウエズを見やり、冷やかな声を浴びせた瞬間、彼の背筋が震え上がってしゃんと伸びる。条件反射と言っても差し支えない動きだった。

ベルは道具を既に小屋に運び終えた後らしく、両腕を胸の前で組んで、ウエズを見据えていた。冷えてはいたが、苦笑のような色も滲んだ、温かくは無いが冷たくも無い眼差しをウエズに注いでいた。ウエズはばつが悪そうに後頭部を掻いていたが、彼女に敵わない事は自明なので、早々に白状する。

「……この村の北にある、雪山だよ。あそこはまだ、ティガレックスやラージャンみたいな、凶暴なモンスターが現れたって話を聞いてないし、安全な今の内に素材を集めておきたいんだよ」

「やっぱり……」はあ、と重たい嘆息を零すベル。やれやれ、と両掌を上に向けて、首を小さく振る。「あんた、あんな事言っついて、やっぱり素材集めに走るのね……さっきの忠告、もう忘れたの？」

「いや、その……あは、あは、あは………」

引き攣った苦笑を張りつけて、何とかこの場をごまかそうとするウエズだったが、じとーつと見つめられて結局失敗に終わる。はあ、と諦めの嘆息を零すと、悄然した顔で頬を掻き、ベルの無言の重圧に、呟くような声量で応じる。

「……僕はさ、行商人としてはまだ半人前だ。素材や道具の独自一人を持っていないから、素材は現地調達しかないんだよ……新鮮だし、何よりタダだし。……偶に街の方で見かけるんだよね、養殖物や紛い物、酷い時は贗物を販売する輩が。ああいう輩を見ると、どうしても思うんだ。僕はできる限りハンターに近い位置で商売がしたいって。そのためには……危険だと分かっても、狩場に入っで行かないと……」

後半は尻すぼみになって、消え入りそうな声量だったため、ベルの大きく苛立ちの含んだため息で掻き消されてしまった。ベルが睨みあげてきたのを見て、ウエズは身を縮こまらせるが、視線だけは根性で逸らさない。

ベルは少し怒気の含んだ顔でウエズを見つめていたが、やがて表情を和らげ、出来の悪い息子を見る母親のような顔で、小さく吐息を漏らした。

「……ま、あんたが言う事が、分からない訳じゃないし、何よりあたしが言った所で、あんたが言う事を聞かないのは、長年付き合っていたら流石に分かるわ。あんたには、あんたの世界があるんだものね。……ま、精々死なないように気を付けなさい」

理解はしていない。納得もしていない。でも、自分が何を言った所で、彼の道を妨げる事はできない。自分の手で止める事ができない、と言う点では、身近に二名ほど似た連中がいるので、彼らが影響して順応できてきた面も若干、自覚していた。

ウエズを止める事を諦めたベルだったが、彼を突き放すだけで別れる程、彼女は狭量ではなかった。人差し指を立て、「でもね、」と前置きして、告げる。

「いいこと？ あたしが死ぬまで、あんたは死んじゃダメなんだからね？」

び、とウエズの顔を、立てた人差し指で指差すベル。その顔には不敵な笑みが浮かび上がっていた。その憎らしい程に素敵な笑顔が、まさにウエズの中にある、昔からのベルの象徴のような気がして、釣られるように苦笑を浮かべてしまう。

「……やっぱり、ベルは変わらないな」

「何か言った？」 険を眉に込めるベル。

「何でもないっす！ ……じゃ、またな」

手を振って、ラウト村を出て行くウエズ。

その後ろ姿を見送ったベルは、懐かしさと共に、忘れていた何かを思い出したような、そんな気がして、後ろ髪を引かれるような思いで、ウエズが消えた門の先を、誰もいないその場所を、暫らく呆れと見つめるのだった。

07・音信不通常習犯

村に珍客とも呼べる行商人のウエズがやって来てから、更に二週間が経過していた。

その後もベル達三人のハンターは、森丘で小型モンスターの間引きや、高額で取引されるキノコなどの特産品の収集など、ハンターとしての生活を全うしていた。大変な事には違いないが、毎日がそれなりに充実し、そして危険ながらも平和な日々が続いていた。

そんな折に、その話は舞い込んできた。

「……………またか」

件の話を耳にした時のベルの反応は、その一言に集約されたと言っても過言ではなかった。ガツクリと肩を落とし、顔を覆うように右手を当て、はああああ、と重苦しい嘆息を零すと言つ、繰り返される悪事を目の前にしたような、分かり易過ぎる程の落胆ぶりを露呈していた。

その話を持ち込んできた村長コニカの反応は全く違っていたが。

「大丈夫でしょうかウエズさん……………まさか、モンスターに襲われて立ち往生しているとかだつたりしたら……………！」

目に見えて狼狽しているコニカ。ただでさえ色白の肌が、蟬のように色素の感じられない白に移ろい、自分に何ら落ち度は無いのに、怯えていると言つ表現が似合う程に、露骨に狼狽していた。

場所はラウト村の酒場。三人のハンターが小型の猪である、ブルファンゴの間引きをし終わった事を報告しにやって来た時に、その話は舞い込んできた。いつもの防具を身に纏った三人は、焦燥に駆られて蒼白になったコニカの話聞いて、二人は驚き、一人はぐつたり頭垂れた、と言つ状態だった。

「……………あのね、村長。ウエズが行方不明つて言うか、音信不通になるのは、そりゃもう日常茶飯事で、毎回起こしてるんですよ……………これで大台の五十に到達するんじゃないかと思う程にね……………」

話の内容は至って単純だ。ラウト村の北に聳える雪山を越えた先に構える集落に、ラウト村を出発して二週間が経過した現在に至っても、行商人　つまりウエズが到着していないと言う、それだけの話なのである。

因みに、ラウト村から雪山の向こうに在る集落までの距離は、大人の足で五日も在れば充分に辿り着ける程で、だからこそベル以外の人間は心配を隠せないのだが……

ベルが思うに、彼への心配は取り越し苦労でしかないのだ。昔のベルなら、彼らの気持ちに同調していただろうが、何度と無く繰り返されると、最早そういう感覚が磨耗しきってしまった。

「でも、二週間も経ってるんだろ？　流石に不味いんじゃないの？」

フォアンが眉を顰めて、いつもより難しそうな顔をして、ベルを見つめる。その顔には不安や心配の色を覗かせていたが、ベルの反応が理解できないためか、困惑の色も混在していた。

ベルは微苦笑を浮かべ、首を小さく横に振った。それは“否”だと。

「ウエズが打ち立てた音信不通の記録は、最長二十七日間。それまで何をしてたか分かる？　素材収集のために、ずっと狩場に不法滞在してたのよ」

狩場は基本的に長時間の滞在が認可されていない。それは大小を問わず、常にモンスターが徘徊している事もあるが、天然の動植物の宝庫でもあるからだ。無期限に狩場に滞在して採取し続けられ、それだけ動植物が消耗してしまう。それを避けるために、ハンターが狩場に滞在してもいい期間が、最長で十時間と定められているのだ。

だが、狩場はハンターだけが滞在する訳ではない。行商人や商隊など、村から村へ、街から街へ行き来する者も、どうしても狩場を通行しなければならぬ時がある。そういう時は流石に滞在を余儀無くされるが、それにしだって、普通は長期間滞在するような輩は

いない。危険なモンスターが棲みつく地帯に、自ら進んで行きたがるような者は、よほど酔狂な人間か、単なる自殺願望者だ。

その中でも、ウエズは前者に入る希少な人間だった。自ら危険な地帯に足を踏み入れ、素材を収集する、ハンター染みた行商人それがウエズと言う男である。

因みに、狩場を横断する時は、概ねハンターを雇うのが主流である。モンスターに襲われたら商売どころか命すら危ぶまれるからであり、普通は単独で狩場へ向かうのは、ハンター以外にあり得ない。「凄いのには……狩場で二十七日も現地調達だけで生き繋ぐ人間なんて、まるで師匠みたいな御仁なのには……」

ザレアが感嘆の嘆息を零したが、ベルは寧ろその師匠の方が気になった。ハンターでもそんな人種がいるのか、と世界の広さをまた知ってしまうと同時に、

(……ザレアの師匠って、本当にどんなハンターなんだろう……) と思わずにいらなかった。

さておき、

「だからさ、ウエズの事は心配しても徒労に終わるだけよ。あいつの事だから、後になってひょっこり村に現れるわよ。悪びれもせず、に、ね」

彼の事を知っているだけに、その結論に行き着くのは必定とも言えた。ベル自身、何度も心配して、その度に平然とした態度で現れる彼を見て、苛立ちを隠せなかった時期も在ったが、それも昔そんな感覚は、彼に対してのみ、完全に凍結してしまった。

が、そんなベルの思考の氷塊を溶解する言葉が、コニカの口から放たれた。

「そうなんですか……? でも 雪山には今、フルフルが出現したと言う情報が、ギルドの方から発表されたのですけれど……本当に大丈夫なんでしょうか……」

フルフル。白いブヨブヨした皮で覆われた、体内に帯電機構を備

えた、不気味な体躯を持つ巨大な飛竜。伸縮する首の先にある、顔の無い口だけの先端から吐き出される、地を駆ける電流をマトモに浴びれば、幾らハンターでも一撃で感電死する事がある。ティガレックスやラージヤンとは別種の恐怖を懐く飛竜種。

一瞬、ベルの脳裏を過ぎったのは、電流が直撃したために致命的な火傷を負って、全身が焼け爛れたように皮膚が変色してしまったハンターの姿。酷い悪臭の許は、全身から湯気とも蒸気とも言える白い煙を立ち上らせて、陸に上がった魚のように痙攣を繰り返す、元はハンターだった人間の成れの果て

何年もハンターとして生計を立ててきたベルだからこそ分かる、モンスターへの恐怖。自分の防具に、フルフルの中でも、亜種である赤いブヨブヨした皮を纏ったフルフルを選んだのも、その時の恐怖を忘れないため。そして同時に、その時に失った仲間を忘れないため……

思わず生唾が喉をゴロリと嚥下していく。背筋に冷たい棒を突っ込まれたような気分になり、一瞬にして酒場の空気が冷えたような感覚を味わいながらも、それでもベルは、気丈に微笑を浮かべてみせた。

「で、でもほら、ウエズの事だし、ゲリヨスの猛ダッシュからも逃げられるんだから、きつと大丈夫よ！」

「ベル」
フォアンの、どこか硬質な感じを孕む声に、ベルは諫められたかのように、一瞬身を縮こまらせる。

視線を向けると、フォアンが何もかも見透かしたような、涼しげに澄ました顔で、小さな指摘を口にした。

「震えてるぞ？」

「っ」

「ベルさん！」

ベルが気恥ずかしさに紅潮したのを無視して、ザレアが高々に声を張り上げた。思わず素の顔でザレアに視線を向けると、彼女は固

めた拳を胸の前で震わせながら、敢然かんぜんと自分の思いを、この場に居合わせた全員の思いを、口にした。

「行くしかないにゃ！ ウエズさんを助けに行くのにゃ！ オイラ達が、やるしかないのにゃ！」

思えば、ベルを取り巻く二人のハンターは、ベルの心底にある思いを容易たやすく汲み取るような、何もかも見透かしているようで、その実、いつだって自分に忠実なハンターだった。

彼らの思いは、どこか素っ頓狂どんきやうで、何かが間違っているような気がするが、反面、ベルの深層心理の断片を呼び覚ましているような気もして……

「……もう、何て言うかさあ……」

長い紺色の髪に触りながら俯うつむいて、ばつが悪そうに呟きを漏らすベル。口ごもるようにそこで言葉を一旦区切り、少し間を開けてから、澄みきった、且かつつ不敵な微笑を浮かべて、口を開いた。

「分かってるわね、皆？」

「了解です、隊長」フォアンが敬礼し、「分かってるのにゃ！」ザレアが片手を挙げる。

心を満たす返答を脳に納めた後、ベルはよく分かっている村長へと振り返り、「そんな訳で、」と前置きを告げてから、

「何日か村を空けさせて貰ってもいいかな？ 村長」

拜むように両手を合わせると、ベルは頭をぺこりと下げた。同様に、フォアンとザレアも懇願するようにコニカを見つめる。

その時点になってようやく事態を呑み込めたらしいコニカは、給仕のティアイリに目配せしてから、コックリつなすと頷いた。

07・音信不通常習犯（後書き）

遂に物語的に問題発生です。ここまですが長かった・・・
とは言え、狩猟はまだ先になります。

次回もお楽しみにノ

08・沈黙の雪山

「ここが雪山、かあ……」
ベルの呟きが漏れたのは、ラウト村を出発して二日半後　日没に差し掛かった頃だった。

場所は、冷厳と聳える雪山の麓を見渡せる、針葉樹の大木に囲まれた、断崖の上。そこに今回の拠点置き、雪山へ向かう準備と計画を整えていた。

拠点は、針葉樹の喬木が周囲に林立しているために、視界に雪山の巍然とした姿は映らないが、ラウト村では感じない薄っすらとした冷気が、その存在を主張するように肌に静かに纏わりついてくる。同じ狩場である森丘とは全く違う雰囲気、現在の狩場　雪山には満ちていた。ベルはそのいつもと違う違和を、肌身にヒシヒシと感じずにはいられなかった。具体的なもので説明するなら　音

「……静かだな。まるで、生物が死滅した後の世界みたいだ」
拠点にテントを設立したフォアンが、背中に背負った斧剣・ジャツジメントと防具が奏でる硬質な音を響かせながらベルの隣までやって来ると、ポツリと独語を漏らした。ベルは振り返らず、コクリと顎を上下して彼の言葉に応じる。

そうなのだ。今いる拠点　つまり大型のモンスターが近寄って来る事の無い場所ですら、完全に音が絶えていた。普段なら聞こえてくるはずの、鳥や虫が自己を主張するような声音が、全く聞こえてこない。ここにあるのは、風が時折奏でる、枝葉が擦れるうそ寒い音　それだけ。

無音の静寂と言う現状が、狩場の雰囲気著しく変質させていた。フォアン君、フルフルは今、どこにいるのかにや？
フォアンを追ってテントの中から出てきたのは、いつもどおり大タル爆弾Gを背負ったザレアだった。大型モンスターがいると言う事態を憂慮しての装備だが、これのお陰でベルは雪山に至るまで極

度の緊張とストレスで、不眠症に陥^{おちい}っていた。その影響で現在、彼女の目許には隈^{クマ}らしき黒い跡が薄っすらと浮かんでいる。

ザレアの装備はいつもの防具（アイルーフェイクの他はインナーのみの、軽装にも程が過ぎる装備）で、先日も持ち歩いてきた正式採用機械鎧を今回も携行していた。フルフルには火属性が有効なので、それを意識しての選択^{チョイス}だろう。

フォアンが装備しているレックスシリーズの防具は、千里眼のスキルが着用者に宿る。千里眼のスキルは、狩場^{エリア}にいる大型モンスターがどこにいるのか把握できる代物だが、実際は見えるのではなく、嗅覚^{きゆうかく}が鋭敏化^{えいびんか}されるのではないかと、と言う説もある。

その辺の謎は、フォアンから説明される事は無かった。そういうスキルを持つている事さえ確かであれば、それ以外は然程気にする事ではないから。

褐色の防具に身を包んだ少年は、道具袋^{ポーチ}から折り畳んだ地図を取り出すと、二人の前に広げて、指を図上に走らせる。

「多分、フルフルは頂上付近にいると思う。鍾乳洞^{しゆりゅうどう}とか、麓の草原地帯でない事は確かだな。それと、もう一頭、大型モンスターがいるな」

「！……フルフルの他にも、まだ大型のモンスターがいるの？」
ベルが思わず顔を顰^{しか}めて唸^{うな}る。全くの想定外と言う訳ではないが、問題をややこしくすると言う点では、喜ばしい事態でない事だけは確かだ。

フォアンは刺々（トゲトゲ）しい頭具^{ヘルム}を傾かせ、難しそうな顔でベルに視線を移す。

「多分そいつはドスファンゴで間違い無いと思う。……どうするんだ？ ベル。ウエズが行きそうな場所とか分かるか？」

ベルは考え込むように、顎^{あご}を掴^{つか}むように手を置くと、地図を見つめたまま暫^{しばし}らく動きを止めた。

「……採取できる場所が在るなら、迷わずそこに向かうのがウエズなんだけど、あたし達はその採取できる場所が分からないのが一番

痛いわね……。風漬しに探す他に無いけど、先にフルフルとドスフアングを始末しておいた方がいいわね。ウエズが見つかった後に奴らに襲われたら目も当てられないし。頂上付近の雪原地帯へと向かいますよ」

二人のハンターが頷いたのを見て、ベルは道具袋に納まっている様々な道具を確認し、フルフル対策に選んだ武器である弓、プロミネンスボウを担ぎ、拠点を出発した。

やがて狩場に陽が落ち、雪山の上空には燦然と極光が輝き始める。

雪山にある洞窟は、凍てつくような温度が保たれた、鍾乳洞である。体を内側から温める飲物ホットドリンクを口にしなければ、あつと言つ間に体力が削られて動けなくなってしまう程の冷気が辺りに満ちている。更に頂上付近の雪原地帯ともなれば、鍾乳洞を更に越える寒気で満たされており、まさに極寒の地に相応しい様相を呈している。

鍾乳洞の中には、大型のモンスターが休憩する巣穴が穿たれている以外は隘路で形成され、巨大な体躯を誇る飛竜種などの大型モンスターが巣穴以外に現れる事は無い。だから、小型のモンスターが小道を徘徊しているはずなのだが……

「……不気味な程に、何もいないわね……」

呟いた声が鍾乳洞の高い天井に僅かに反響していく。ベルの違和を感じさせる小声に応じる者はいなかった。

普段から雪山に来ている訳ではないので、この辺のモンスターの生態に就いてあまり分かっていないが、別の狩場の雪山に行った時には、こういう鍾乳洞に小型のモンスターが多く屯している記憶がある。大型のモンスターが頂上付近の雪原に現れ易いためかどうか分からないが、追いやられるようにして小型のモンスターが鍾乳洞に集結している様がよく見られた。

しかし、今は寒々しい程に、視界に何も映らない。

まるで、生物が死滅した後の世界みたいだ。

拠点にいた時のフォアンの発言が、不意に脳裏を過ぎる。それが
いかに馬鹿らしい思考だと分かっている、どうしてもその発言を
無視する事ができない。

やがて、鍾乳洞を抜けた先　雪原地帯へと辿り着く。

「……………」

ベルは、その光景に、思わず息を呑む。

雪原は少し吹雪ふぶきいていたが、視界を遮さへられる程ではなかった。雪
山を抉えぐったように忽然こっぜんと姿を現した開けた景色に、三人のハンター
は一瞬、動きを止めた。

雪が厚く降り積もり、固く地肌を覆い隠してしまった、白い絨毯じゅうたん
の上。そこに、ガウシカやポポと呼ばれる草食のモンスターが大量
にあつた。いた、ではない、あつた、である。

「グルルルル……」

三人の視界に映るのは、巨大で、且かつ奇怪な、白い塊。それは、
人の丈を優に超える大きさを誇っている。

ずんぐりとした体から伸びる、太く長い、頸骨けいこつがたくさんあるた
めに、奇怪な動きで蠢うごめく首。首の先には顔など無く、先端が裂ける
ように開き、そこから無数の歯のそが覗き、隙間からポタポタと透明な
涎よだれを垂らしている。

ずんぐりとした白い体には巨大な両翼が付随ひきしている事から、一
目で飛竜種と視認できる。

飛竜種　奴こそが、飛竜種の中でも一風変わった姿と特徴を持
つ大型モンスター、フルフルである。

通常の飛竜種に在るべき甲殻こうかくや鱗うろこが一切無く、ブヨブヨした柔ら
かい皮で全身を覆っており、その表面は月光を浴びて油膜ゆまくが張って
いるように、てらてらと光を照り返していた。

その口から漏れ出す涎には、大量の紅が混在していた。

そして、涎の色の許であろう存在が、辺りにごまんと転がってい

た。

白い雪原を赤く彩るそれは　ガウシカとポポの屍しかばねの群れ。皆、全身を隈なく破壊され、殆ど鮮血しか残っていない状態を曝さらしている。既にフルフルに食い尽くされた後だ。

盛大な食事を終えた白い化物は、首から先の、涎が垂れ流しである、口でもあり、鼻としても機能する穴を「ふんふん」とひくつかせ、まだ獲物は無いかと鋭い嗅覚を用いて彷徨さまよっていた。

屠殺場と化した雪原の前に、ベルは一瞬表情を強張こわばらせたが、すぐに獵人としての意識に切り替え、少女としての恐怖を思考から排斥せきした。纏もつれそうになる舌を動かして、隣に佇たたずむ二人のハンターへと、小さく声を掛ける。

「……この前のイヤンクックなんて、目じゃないかも知れないけどやれるわよね？」

ベルの投げた言葉は、実に今更な質疑だった。

この期に及およんで、逃げ出すような面々ではない。それは、二週間もの付き合いで、十分に理解している。ならば何故、分かりきった言葉を投下したのか？ ……それは、すぐに知れた。

「ベルさんなら、やれますにや！」

ザレアの返答で、納得した。

今の質疑は、自身に投げられた確認だったのだと。

トラウマにもなりかけた、仲間が感電死する様を再び呼び覚ましそうになった自分への、警告と警鐘なのだ。

それを理解したベルは、顎を小さく引き、表情を引き締めた。

今は、そんな事に囚とらわれている場合じゃない。そう、思考を現実現実に引き戻した。

「行くわよ」

ベルの発声を合図に、二人のハンターも行動を開始する。

08・沈黙の雪山（後書き）

次回より遂に狩猟の開始です。

この辺から割とシリアス風味に展開が進んでいきます。

次回もお楽しみにノ

フルフルがこちらに気づく前に、ベルは道具袋から球体の道具を取り出すと、思いつきり白い巨軀へと投げつけた。球体の道具は僅かに弧を描くようにして、フルフルの胴体に当たり、破裂した。すると、茶色い色素を帯びた、モンスターの糞の臭素。つまり物凄いい臭いが辺りに撒き散らされ、鼻腔を刺激する空気が狩場に満ちる。

フルフルは視覚が退化しているため、鋭敏化された嗅覚を用いて索敵を行うモンスターである。確かな事は分からないが、フルフルは暗所で進化を遂げたモンスターで、視覚の代価として嗅覚が発達した、と言う説が一番有力として流布されている。

それを逆手に取る戦法として、ベルはウエズから買い取った道具こやし玉と呼ばれる、モンスターの糞と素材玉を調合して造った、破裂すると鼻が曲がるような悪臭を周囲にブチ撒ける道具を使用したのである。これによって、フルフルは敵。つまりハンターがどこにいるかすぐには把握できないはずなので、その間に電光石火の如く、攻撃を加えようという魂胆だった。

フルフルが突如として噴出した凄まじい臭気に困惑し、その場に釘付けされたように動きを停止させた。まだ発見されていない。そう判断し、ベルは声を出さずにザレアに合図を出した。

ザレアはネコの被り物を無言のまま上下に振り、恐ろしく素早い動きでフルフルの足許へと駆けて行く。

大タル爆弾Gを背負ったまま走る行為は、想像以上に艱難を極めると推測できる。大タル爆弾Gは起爆装置こそ付随していないが、石ころがぶつかった程度の衝撃で起爆する、非常に繊細な面を持つ代物である。それを、震動を与えないように注意しつつ、いつもと変わらぬ速度を保持して走るのだから、ザレアは、恐らく達人の域に達する足運びを体得しているのだらう、とベルは常々思っていた。

そこに至るまでの道程は、恐らく常人には考えも付かない程、途方も無く、険しいものに違いないとも。

「ヴウルルル……」

ザレアがフルフルの眼前に辿り着こうとした、その瞬間だった。

フルフルの、先端が吸盤のような尻尾が、雪化粧を施した地面の上に張りつき、全身を青白く発光させ始める。それに気づいたベルは思わず「止まって！」と叫び声を上げたが、ザレアは既にフルフルの行為を察知していたようで、ベルに言われるまでも無く相手から数歩手前で足を止めていた。

動きの鈍重なフルフルには、それを補って余りある能力が宿っている。それが 帯電機構。帯電飛竜と称される所以でもあるその能力は、ブヨブヨとした皮全体に電流を走らせ、攻撃を加えようとする者から自己を守る“盾”とし、且つ触れる者を放電で感電死させる“矛”ともする。

フルフルは、まさにその攻守両方を同時に行える、全身に電撃を纏う行動を起こして、迫り来る脅威を振り払おうとしてきた。首を地面に垂れ、全身を青白く発光させて、電流の走る、空気に輝が入るような音を辺りに響かせる。

放電している間は、フルフルは身動きを取らない。それを利用して、ベルは番えていた矢を撃ち放つ。力一杯に弦を振り絞った一撃は、軽々とフルフルの胴体を貫通する。その瞬間、弓の持つ火の属性が付加された矢の効果で、傷口から一瞬だけ炎が噴き上がる。

「ヴァオオツ」

思わず放電を解いて、不意の痛覚に一瞬たじろぐ白い巨体。火の属性が弱点のフルフルなので、矢が貫通した時の痛みより、燃え上がった炎の熱さの方が効いたように映った。

その隙を衝いて、ザレアが大タル爆弾Gをフルフルの足許に下ろし、更に小タル爆弾Gをセットし、駆け出す。

「皆、耳を塞ぐのにな！」

と叫びながら、前へ体を投げ出すように飛び込むザレア。

刹

た瞬間は、いかなハンターと言えど、その場に縫い止められるように行動停止を余儀無くされてしまう。

狩場全域を震え上がらせる咆哮が、空気を蹂躪するように辺りを埋め尽くしていく。その中で行動できる者など、唯の一人として存在しなかった。

咆哮が納まった瞬間、フルフルはフォアンの方を向いたまま、尻尾の吸盤を地面に張りつけ、口許を青白く発光させ始める。

(不味い ツー！)

ベルは奴が何をしようとしているのか悟り、耳から手を離れた瞬間、大声を張り上げた。

「逃げて、フォアン！！」

固よりフォアンもそのつもりだったが、咆哮が終わった瞬間と言う事もあり、咄嗟には脳の信号を肉体が正しく認識してくれない。それでも無理に足を動かし、その場からの回避行動を取り始める。

その間にフルフルは、青白く発光する口を地面に水平に倒し、雷の如き速さで雪の絨毯を駆け抜ける紫電を吐き出す。

フォアンと紫電の距離は刹那に縮まって行く。その上、地を駆ける紫電は一つではなかった。フルフルの口許から枝分かれして、その数は既に五つになり、攪拌するように地を走って行く。

「く　　ッ」

その一つが、フォアンの許へと雷光の如き速度で駆け寄る。このまま走り続けても間に合わない　ベルが一瞬、最悪の光景を想像した、その瞬間、フォアンは斧剣を手放して、前方に向かって体を投げ出すようにして、跳躍した。

間一髪だった。咄嗟に手放した斧剣に紫電がぶつかっただけで、雪上を滑走するように頭から突っ込んだフォアンには傷一つ無い。流石のフォアンも、冷や汗を掻いているように見える。

「何て事するのにゃ！」

紫電を吐き出した後の隙だらけのフルフルの横っ腹に向かって、ザレアが正式採用機械鎧で横殴りに叩きつける。彼女の一体どこに

そんな臂力が秘められているのか謎で仕方ないが、フルフルの巨軀が数メートル水平に滑走する。火の属性効果も宿り、殴られた箇所からは一瞬だけ橙色の炎が噴き上がる。

「ヴオオウ!?」

思わず踏鞴を踏んで体勢を立て直そうとするフルフルに向かって、今度はベルが攻撃を放つ。貫通する力を有する矢がフルフルの両足を貫くと、噴き上がる炎も手伝い、白い巨体が横倒しになる。

「今よ!」ベルが矢を番えながら、二人に向かって叫ぶ。

フォアンが手放した斧剣を拾い上げてフルフルの頭部へと駆けつけ、背負い込む形で斧剣へと力を溜め込み始める。ザレアはフルフルの横つ腹を潰さんばかりに何度も正式採用機械鎚を振り下ろす。その度にブヨブヨの皮が柔らかい感触を返して沈み込み、叩き込まれた箇所から炎を噴き上げる事で、徐々に(じよじよ)に皮膚が赤黒く変色し始める。

「どうるりやー!」とフォアンが喊声を張り上げ、力を溜め込んだ斧剣を、満を持してフルフルの頭部へと叩き下ろす。

ぞぶ、と柔らかい肉をぶった切る感触がフォアンの手首から腕へと駆け抜けていく。フルフルの首が縦に断ち割られ、夥しい出血が辺りに撒き散らされた赤色に混ざって飛び散っていく。

「ヴオオオオオオオオオオ!」

フルフルの絶叫。それは先程も発せられた バインドボイス だった。その場に居合わせた全員の動きが凍結したが、ベルの中には僅かな慢心が生まれていた。

恐らく、今のフォアンの一撃は大ダメージだろう。もう少しダメージを与えれば、もしかしたら倒せる

そう、まさに淡い幻想のような勝利を確信した、その瞬間だった。
「ブルルル……」

轟音とも言える咆哮に混ざって聞こえた、別の生き物の鳴き声。振り向く事など許されない。動きを完全に拘束されたベルの視界に映るのは、同じく行動を完全に停止させられた二人のハンター、

そしてその元凶であるフルフル。

そこに、まるで巨大な岩石のような塊が、弾丸のような速度で、走り込んで来た。

濃い焦げ茶色のゴワゴワした体毛を纏い、大人の胴ほどの太さがある二対の牙を持ち、フルフルよりも大きい体躯を誇る、巨大な猪の化物。

名はドスファンゴ 厚い毛皮に覆われ、長く太い牙を有する、牙獣種的一种、ブルファンゴ 猪の長だった。

その巨躯が、 バインドボイス で地面に釘付けにされたフォアンの体を、まるで小石を蹴り飛ばすように容易く、 吹っ飛ばした。

突進をマトモに喰らったフォアンは、まるで蹴鞠のように軽々と宙を舞い、蹴鞠のように何度も雪上を跳ねて転がり、やがて慣性を失って動きを止める。

防御なんて、している訳が無い。この目で見ていたのだから、間違い無い。質量を伴う爆音を両手の隙間から聞いている最中に視界が捉えた悪夢を、思考はすぐには受け入れようとしなかった。

認識できない。こんな事、起こり得ない。

雪山全体を揺るがす咆哮が、止む。

「フォアン君っ！」

ザレアの絶叫が、ベルの鼓膜にまで届けられる。だが、脳がそれを言葉として認識するには、少しばかり時間を要した。

(……フォアン?)

ドスファンゴの突進をマトモに受けたフォアンが、緩慢な動きで立ち上がるうとしていた姿が、視界に飛び込む。生まれ立ての小鹿のように、覚束無い足つきで、ゆっくりと、だが確かに立ち上がるうとしていた。

幾ら何でも、フォアンがドスファンゴの一撃で死ぬ事などあり得ない。それは、現実としてそうだと確信できた。それだけの防御力が、褐色の防具に込められている。

ザレアがフォアンへと駆けつけようとしている姿が、あまりの光景に考える事を放棄したベルの視界に映り込む。そのザレアの前に立ち塞がるようにして聳え立つ大猪。奴は、糸の切れかけた人形には興味を無くし、次の玩具として選んだのは、活きがいい、ネコの被り物をした少女のようだった。

「……………!!」
思考が、急速に現実を受容し始め、ベルは脊髄反射に似た速さで、行動を再開した。

フォアンを助けなければ。

意識を、そして思考を支配したのは、その思いだけだった。だが、残念な事に、悪夢はこれで終わりではなかった。

フルフルが、再び雪の絨毯の上に、尻尾の吸盤を張りつけ、口許に青白い光が凝集していく様が見て取れた。

まさか、とベルは泣きそうになった。

嘘だ、とベルは立ち止まりそうになった。

止めて、とベルは

「ヴォアアアアアア!!」

吐き出された紫電が、立ち上がりかけたフォアンの全身を食い破るように、貫いた。

「いやああああああああああああああああああ

ツツ!!」

ベルの絶叫が、雪山を駆け抜ける。

09・二重の悪夢（後書き）

“こやし玉”に関してのちょっとした補足をば。

こやし玉と言うのは、確かに悪臭を撒き散らす物ではありませんが、フルフルが気づかなくなる、と言うのは嘘設定です。実際は投げても即座に気づきます。

こやし玉の実際の効果は、大型モンスターをマップ移動させ易くするだけの効果しかありません、悪しからずー（・ー・）ーでも、使ったら何と無く効果がありそうな気がしませんか・・・？

雪山の頂上付近に広がる雪原地帯は、地獄絵図と化していた。辺りにはフルフルの食い散らかしたガウシカやポポの残骸が散乱し、雪上を薄っすらと赤く化粧したように鮮血で染めていた。

その中心に居るのは、豪勢な食事を終えて巢穴へ戻ろうとしていたフルフル。だが、その巨軀は今では赤黒く変色した部分が目立ち、足や胴には風穴が開き、首には深く裂傷が走り、鮮血を滴らせ、更に雪原に赤い彩りを加えている。

そのフルフルから三十メートルほど離れた先に、一人の少年が倒れている。陸に上がった魚のように全身を小刻みに痙攣させ、白い湯気のような蒸気を立ち上らせながら。だがそれ以外の動きを全くしないし、生死も定かではない。寧ろ死んでいると説明された方が納得できる状態で、無造作に転がっていた。

その両者を繋ぐ間には、巨大な猪と、何もしなくても凍死するのではないかと思える程の軽装に身を包んだ少女が対峙していた。ザレアの視界は大猪ドスファンゴに遮られているようだったが、最悪の事態を想像したのか、幾分その動きが停滞。ではなく、驚く程に攻撃的になった。

「退けつて言ってるにや！！」

振り返った大猪へと、自身の身の丈の三倍以上は在ろうかと言う巨大な肉の塊へと、渾身の力を込めた一撃を、一切の容赦も遠慮も手加減も無く、叩きつける。

その光景を愕然とした面持ちで眺めていたベルには、悪夢がまだ続いているとしか思えなかった。

フォアンが死んだ。

その事実が、ベルの脳の一番深い場所に、烙印らくいんのように刻みつけられた。

酷い痛みだった。視界が捉える全てが信じられない。脳が受けた視覚に因る暴力が起因し、思考だけが過去へと遡さかのぼっていく。

眼前で、何の抵抗も無く、仲間が感電死する悪夢。

彼の纏まとう悪臭と、見るに堪たえない醜悪しゅうあくな姿に、それ以前の彼の姿を、全く思い出せなくなる悪夢。

もう二度と、彼と狩獵を行う事も、心を交わす事も、況ましてや出逢う事もできなくなつたと言う悪夢。

眼前に巖然たたずと佇む現実たは、まさに悪夢と呼ぶべき過去の再現そのものだった。

「ベルさんっ！」

ベルを地獄の淵ふちから呼び覚ます声が、鼓膜まで届いたが、それを脳が認識する事は無い。ベルは今、悪夢と言う名の檻おりに囚われ、意識を外に向ける事ができない状態だった。

故に、フルフルがこちらを向いて、フォアンを葬ほうじった、地を駆ける雷を放とうとしている事に気づかなかつた。

「ベルさんっ！」

フルフルの口に青白く発光する塊かたまりが凝集し、射出の準備が整いつあるのにも、気づけない。

ベルは、自分が泣いている事にさえ気づかず、ただ茫然自失の態ていだった。痙攣けいれんを繰り返すフォアンを見つめているようで、実は虚空こくうしか見ていない瞳で、涙を零こぼしていた。

「ベルさ」

紫電が、放たれ

ベルの頬ほを張り飛ばす、ぱあ んっ、と言う、乾いた音が辺りに響いた。

その直前には、フルフルの口に直接こやし玉が投げ入れられていた。突然口の中に湧いた異物感と異臭に、思わず紫電を見当違いの方向へと吐き出し、苦しそうにその場でもがき始める白い巨体。

痛みを伴った、痺れるような熱さを頬に感じ、ベルは意識を再び現実へと戻した。

そこには見知った青年の顔が在った。

「やっぱりベルは、ハンターに向いてないな」

ウエズが不敵に微笑み、ベルの頬をもう一度張ると、逆にベルに頬を六度張り飛ばされた。

「いでエエエエ!!! ちょっとおまツやり過ぎだろツ!?!」

「あんた、どうして……?」

正気には戻ったベルだったが、涙の跡に気づかぬまま、まだ頭が覚醒しきっていないような力の無い様子で、眩きを漏らす。

ウエズは張られたせいで若干赤らみ、先日のように腫れ始めた頬を摩りながらも、真剣に表情を引き締める。

「それより今はここから脱出する方が先決だろ? あのレックスの男の子は死んだ訳じゃない、まだ助けられる余地はある。今こそお前の出番だろ? ベル」

死んだ訳じゃない。その単語に反応するように、視線が雪上に伏した少年へと向かう。フォアンは、非常に億劫そうではあったが、確かに立ち上がるうとしていた。

生きてる。

死んでなかった。

「
」

ベルの瞳に、意志と言う名の力が湧くのを、ウエズは眼前で見つめていた。

視界の奥　大猪ドスファンゴと一対一で格闘を繰り広げるザレアは、怒りに身を任せてドスファンゴの横っ腹をぶっ飛ばした。砲弾よりも重たい一撃で、フルフル以上の巨体を誇るドスファンゴの巨軀が　宙に浮き上がる。

横倒しになったドスファンゴは、すぐには立ち上がれそうに無い。フルフルは悪臭と口腔の異物感で、すぐには動けそうに無い。

狩猟で言えば、好条件が揃っている状況だ。今なら、正常な状態のハンターが挑めば、勝ち目は在るかも知れない。

「　ザレア！　フォアンを背負ってこっちに逃げて来て！」

だが、ベルはその選択をしない。どれだけ狩猟で優位に立っても、退くべき時に退けないハンターの死期は常に身近に用意されている。ベルは、今が退き際だと感じ、それをザレアに叫んで伝える方を優先した。

ザレアはネコの被り物を大きく頷かせると、恐ろしい速さでフォアンの許へと駆け寄り、自身より少し大きい少年の体をヒョイと担ぎ上げると、ゲリヨス顔負けの速さでこちらへ向かって走って来た。ベルはその間にウエズに指示を出して、けむり玉を取り出させ、それを使って辺りに煙幕を張った。ドスファンゴが容易に追ってこられないように対策を講じてから、ベルはザレアが追いつくのを待ち、狩場からの遁走を図った。

生き延びるための敗走に、躊躇いなど微塵も湧かなかった。

10・敗残（後書き）

レックス装備で大猪の突撃&フルフルのプレスで死ぬ、と表記したのは、相手が上位モンスターだからと仮定したためです。実際にあると非常にイラツとくるコンボです。

フルフルとやり合う時は、盾ありの武器か、高級耳栓は必須ですよ
ね。

11・引き摺る影

雪山の頂上を拝める雪原地帯に、身を屈めれば入れる横穴が穿たれていた。

大型のモンスターはおろか、小型のモンスターですら入り込む事はできないであろうその穴の先で、二人のハンターと一人の行商人は、運び入れた一人のハンターの治療を行っていた。

「これで火傷の治療は終わりだ。言っても、応急処置みたいなもんだから、絶対安静が前提だし、すぐにも街の医者に見せた方がいいだろうな」

ウエズはそう言うと、自身の前に広げた医療用の道具を仕舞い始める。

「オイラから見て、フォアン君は体力的に疲弊しきってるだけだと思いのにや。回復薬さえ飲んでくれたら、何とかかなりそうにやんだけどにや……」

ザレアが心配げにフォアンの顔色を窺いながら、ポツリと呟きを漏らす。

フォアンは気を失っていた。逃げる時に、立ち上がるような気力を見せていたが、あれは無意識に行っていたようで、ザレアが駆けつけた時には、既に意識が無かつたらしい。苦しそうに唸りながら胸を上下させている姿は、痛ましい事この上ない。

今のフォアンは防具を脱がされ、全身に負った電流に因る火傷の治療を、ウエズが行っていた。薬草やアオキノコを、傷口に満遍なく塗り込んだのだが、その効果がどれ程のものか、ベルには想像が付かない。

気を失っているフォアンは、回復薬を飲めなかった。無理に飲ませようと口に注ぐと、咽るようにして吐き出した次第だ。これでは外傷が治っても、体力的な問題で、意識を取り戻すのは難しいだろう、とはウエズの弁。

弱々しい呼吸を繰り返すフォアンを見下ろして、胡坐を掻いていたベルは、ザレアの手から回復薬を奪い取った。

「どうするのによ？ フォアン君に飲ませようとしても、吐き出しちゃうのによ……」

ザレアがネコの被り物の正面をベルに向けて尋ねるのに対し、ベルは無言のまま回復薬の蓋を開け、自身の口に含んだ。

それを見たウエズが思わず瞠目する。

「おまつ、まさか口移し　っ!?!」

と慌てふためくウエズを見据えると、ベルは怪訝そうに眉根を寄せた後、口に含んだ回復薬をそのまま嚙下した。こくり、と喉が上下する。

ウエズが慌てふためいた表情のまま固まった瞬間、体の内側から癒されていくような、不思議な感覚が全身に広がったのに気づいた。その感覚は、回復薬を飲んだ直後のような、体の内側から元気が湧く時の感覚に似ていた。

ザレアも同じ感覚を味わったのか、アイルフエイクをベルに向けたまま、何が起こったのか無言で説明を促していた。

ベルはウエズに冷たい眼差しを向けた後、ザレアに振り返って口を開いた。

「広域化　ってスキルを聞いた事は無い？　回復薬とか、解毒薬を、広域化　のスキルを持った人が飲むと、周囲にいる人も同じ効果が得られるって言う」

「あにゃあ、話だけなら聞いた事があるのによ。実際に体験してみると、まるで魔法みたいな力に感じるのによ!」

ザレアが「これがそうなのによ」と感心したように頻りに頷く。ベルの話聞いた上で、ウエズは風呂敷の中を漁り、回復薬グレートと言う、回復薬よりも効能の強い瓶を取り出して、言った。

「だったら、こっちを飲んだ方がいいんじゃないか？　こっちの方がもっと回復するだろうし。今ならタダでくれてやるからさ」

「ありがと」とベルは受け取ったが、飲むとはしなかった。「説

明を加えるとね、広域化のスキルって、使用者が飲む物の効能が強過ぎても弱過ぎても駄目らしいの。だから、回復薬は良くて、回復薬グレートとか、応急薬じゃ、スキルは発動しないのよ」

「え、そうなのか？ だったらその回復薬グレートは……」

「タダでくれるんでしょ？ ありがたく頂いとくわ」

極上の笑みで返され、ウエズはガツクリと肩を落として「あああ」とため息を零した。

(……詐欺過ぎる……) 心の中で涙するウエズ。

「それで、ウエズ。あんた、こんな危ない狩場で何してんのよ？

お陰でフォアンが死にかけたんだけど、どう責任取ってくれるの？」

治療を終えたフォアンの体に再びレックスシリーズの防具を着込ませながら、ベルが陰のこもった声を漏らす。いつにも況して、刺々(トゲトゲ)しい口調だった。

ウエズは若干怯みながらも、頬を掻きながら応じる。

「いやあ、実は……」

「殴ってもいい？」

「待って！ せめて話をさせて！ いや寧ろ話を聞いても殴らない

で！ お願いします頼みます頼みます助けて助けて助けて助けて！」

半べそを掻いて跪拝するウエズに、「はあ」と嫌悪を感じさせるため息を吐き出すベル。そして情けを掛けるように、「じゃ、話してみなさいよ、取り敢えず」とぞんざいに上告を許可する。

「いやさ、僕もこの間までは普通に素材を収集してただけだよ、流石に何日も経ったから下山しようと思ったんだよ。でも、そこにフルフルやらドスファンゴやらが同時に出現だろ？ 出るに出不らなくなつてさ……逃げようとも思ったんだけど、フルフルの電流は流石に僕みたいな行商人が避けられるような類じゃないし……」

「……………」

凄く、ものすごく呆れ返った仕草で肩を竦めるベル。最早ため息すら出すのが面倒だと言わんばかりに冷めた視線でウエズを射抜く。

ウエズはばつが悪そうに俯き、何とかベルの視線から逃れようとするが、無駄だと分かっているのか、すぐに向き直ると、言い訳ではなく、別の台詞を吐き出した。

「それよりベル。お前……まだあの時の事、引き摺ってるのか？」
「……………」

返答は無かった。

ベルは俯いたまま唇を噛み締め、苦しそうな沈黙を返すだけだった。それこそが、返答になっていると、ウエズには分かっていた。嘆息を零し、真剣な表情でウエズは告げる。

「ベル。お前はやっぱり、ハンターを続けるべきじゃない。……僕が言えた義理じゃないけど、過去を引き摺ってたら、いつかその過去に食われる」

ぎり、と奥歯を噛み締める音が聞こえてきそうな空気の中、ザレアがよく分かっているように、ベルに声を掛ける。

「ベルさん、何か遭ったのにかや？ さっきも、取り乱していたみたいになっただけど……」

「……遭った、と言えば遭ったわ」言い難そうに、口の中で反響するような小声で、ベルは呟く。「でも、昔話を聞いてもどうしようもないわ。……だから、その話は、これでおしまい」

「ベルは昔、狩猟仲間を失ったんだ」
「っ、ウエズ！」

容易く秘密を暴露された事に対する怒りと恥辱に顔を赤らめ、食って掛かろうとウエズの襟首を擦り上げるが、彼は動じなかった。冷静な顔で、ベルの顔を真正面から見据える。ベルは、すぐに正視に耐えられなくなり、やがて目を逸らして襟首から手を離す。

「……その仲間を屠った相手が、フルフルだった」
ウエズが、淡々と事実を述べる。ベルは顔を伏せ、何も言わない。ザレアはアイルーフェイクに隠された顔がどんな表情に彩られているのか、全く窺わせる事無く、無言で話に聞き入っている。

「……その時の残像が今も残ってるんだろ？ ベル。それはいつか、

お前をダメにする。自覚も、してるはずだ。そうなる前に、ハンターは辞めるべきだよ」

優しげな口調で告げられる、残酷な表明。ベルは唇を血が滲む程に噛み締めて、発言に耐えていた。

「ちよつとした事が命取りになる世界だろ、ハンターの世界は。だから」

「ウエズ、それ以上は止めてくれないか？」

急に湧いた声は、横たわった少年から発せられたものだった。

一同が思わず視線を向けると、瞼を閉じたままのフォアンが、口だけを動かして、いつもの声量で声を紡いでいた。

「ベルは、自分の意志でハンターをやってるんだ。ウエズに言われるまでも無く、それは自分で決められる。ウエズに決められてハンターを辞めて幸せを掴んだとしても、必ず後悔する。だから、それ以上は止めてくれないか」

「……フォアン、って言ったかな。君は、ベルがハンターを続けてくれないと困るから、そんな事を言ってるんじゃないのかい？ ベルがハンターを辞めたら、ラウト村のハンターが減ってしまう。そうなれば、一つの依頼でも難易度が上がるだろう。それが怖いんじゃない」

「ばーんっ、とウエズの頬を、渾身の力がこもった手が、張り飛ばした。」

一瞬何が起こったのかわからなかったウエズだが、その視線が張り手の先。ベルに辿り着くと、得心したように、だが呆然とした表情で、相手の出方を待った。

鋭く眇められた両眼でウエズを睨み据えると、ベルは奥歯を軋らせて、怒りの形相を滲ませ、口を開いた。声は、震えていなかった。「フォアンに言われるまでも無いわよ、あたしはハンターを続ける。ウエズ、あんたが何を言おうと、あたしはハンターを辞めない。あたしは、あたしには、あたしの道がある。あんたなんか邪魔される義理は、微塵も無い！」

噛みつかんばかりに発せられた声を、ウエズは放心した状態で受け、やがて諦念を感じさせる表情で肩を竦めた。表情を和らげ、その顔に苦笑に似た笑みを刷く。

「そう言うんじゃないかって思ってたよ、ベル。……でも、確認したかったんだ。本当にベルが、これからも狩猟を続けていけるのかどうかを、ね」

「ウエズ……？」

「過去を引き摺ったまま狩猟をしても、いつかは過去に食われる。その考えは変わらない。……でも、その過去が霞むような仲間を見つけたのなら、僕はそれでいいと思う。忘れる、って言うてる訳じゃないよ。でも、いつまでも過去を気にしてたら、ダメなんだよ」

言って、ウエズは微笑んだ。いつかウエズに向けて見せたベルの微笑が、そっくりそのまま投影されたような、澄んだ微笑だった。

「……頑張れよ、ベル。僕はハンターじゃないから一緒にには狩猟に行けないけれど、道具や素材を提供して、手伝う事ぐらいはできるんだから」

11・引き摺る影（後書き）

短い過去篇です。

あんまり物語を暗くさせないようにと思い、短く纏めたりもりです。物語も終盤に入っているのです、このまま最後までお付き合い頂けたらと思います」(・)(・)(・)

12・再出発

「ドスファンゴとフルフル、二頭同時に相手にするのは、ハッキリ言つて無理。だから、まずはどちらか一頭を仕留めて、それから、もう一頭に取りかかるべきだわ」

雪山の頂上付近に穿たれた横穴の奥。そこは吹雪もあまり入り込まない、比較的平穏さを感じさせる地帯だった。大型モンスターのみならず小型モンスターも入り込まないために、ハンターでなくても安全が確保できる場所である。

そこに現在、三人のハンターと、一人の行商人が座り込んでいる。辺りは夜闇に包まれ、視界が悪い状態だったが、動くのに支障が出る程ではなかった。まるで闇が質量を持っているかのように、重圧を感じる静寂が一带に敷かれている。

四人の前には、灯りの代わりに光蟲と呼ばれる、自ら光を放つ虫の入った籠カゴが置かれていた。その僅かな光源を頼りに、雪の積もった地面に敷いた雪山の縮図である地図を見つめている。

「二頭が雪山にやって来てから何日か経ったからこそ言えるんだけど、フルフルはこの頂上の狩場には近づいて来ないみたいだよ。ドスファンゴは、雪原地帯を徘徊はいかいするようにグルグル回っているみたいだから、この近くまでやって来る事がある」

赤い種をすり潰して液状にした物で、地図の中に線を加えていくウエズ。見ると、フルフルとドスファンゴの活動地域が記されていた。

「尤も、確実とは言えないと思う。僕も、流石さすがに疲れたら眠るし、あまり体力を消費しないように生き繋つないでたから……」

ウエズのような行商人は、大きな風呂敷を使って大量の道具を持ち込む。持ち込める道具類の規制ゆゑが緩ゆるいだけに、すぐに道具が尽きる事は無いだろう。しかし、すぐではないだけで、何れは底を尽くつくそのための、ホットドリンクや携帯食料などの、体力やスタミナに関

係する道具をできる限り節約せねば、狩場で生活する事など不可能に等しい。

携帯食料の味気の無い干し肉のような物を口に挟みながら、ベルは地図の一番上 雪山の頂上付近を指差しながら、口を開く。

「フルフルが絶対に来ない、とは言い切れないけれど、来る可能性が低くて、且つドスファンゴが確実に立ち寄るのなら、ここで網を張るのは堅実だと思うわ」

「まずはドスファンゴを狩るって事にやね？」

「ズレアが地図から顔を上げ、ベルの顔に視線を向けると、彼女は顎あごを引いた。

「あんな馬鹿でかいドスファンゴは初めて見るけど、基本は同じはず。けむり玉と、シビレ罨、あとズレアの力さえあれば、何とかなるはずだわ」

「それが…… 大変な事に気づいたのにや、ベルさん」

「え？ 何かおかしいトコでもあった？」

ベルが思わず、今の作戦に変な部分が在ったか思い出そうとする
と、ズレアが涙声で口を挟んだ。

「ば、爆弾がもう無いのにや……」

「…… ああー。いや、ズレア。あんた、爆弾が無くても十分に強いから。気にしなくていいわ」

「で、でも！ 爆弾が無いと、オイラ、力が百億分の一も出ないのにや……」

「衝撃の発言！？ ちょっと、それどういう事！？ さっき、爆弾が無いのに、ドスファンゴをぶつ飛ばす程の力を出してたじゃない！」

「あれは…… ちょっとした弾はすみだったのにや……」

「弾みであるのパワー！？ あんたの本気が、本気で怖くなってきたわ……」

「ズレアが力を出せなくても、代わりに俺がいつもの二倍働けば、大丈夫だろ？」

ズレアの発言に思わず体を震わせたベルだったが、続くフォアン

の発言に別の驚きを表す。

「あんだ、その体でやるつもりなの！？ 今だけは、安静にしてなさいよ！」

「それはできない相談だぜ、ベル。俺は、何が何でも二頭を討伐してみせる。……大丈夫、俺は死なないんだ」

「何を根拠にそんな大言吐けるのか知らないけれど……何を言っても聞かないとは言え、今回だけは止めときなさいよ、フォアン。そんな満身創痍で、どうやって二頭も相手に……」

「するのよ、と続けようとしたベルの前で、フォアンは道具袋から、電撃を喰らっても無事だった瓶を取り出す。

一見して飲みたくなくなるような、深い紅色を湛えた、どろりとした液体が納まった瓶を見て、ベルは小首を傾げる。

「それ、何？ ホットドリンクじゃないみたいだけど……」

ベルは初めて見るようだったが、二人ほど驚愕の声を走らせる者がいた。

「ま、まさかそれは……！」 いにしえの秘薬かにや！？」

「へ？」とウエズとザレアを振り返るベル。「……って、何？」

「おまつ、知らないのか！？ いにしえの秘薬つーと、市場に出回る事なんて滅多に、つか出回らないんだ！ 製造法を知ってる者自体が希少な、稀過ぎる代物なんだぞ！」

「オイラが聞いた話じゃ、いにしえの秘薬は飲むだけで、肉体もスタミナも全快になるとか。全快になるだけじゃなく、本来持っていた体力を更に底上げる程の効能が宿っているとも聞いている、凄いい代物なのにな！」

二人の力説に若干怯みながら引いていると、フォアンはそれを何の躊躇いも無く喉に流し込んだ。

「あーっ！」と二人の絶叫が雪山に木霊する。

フォアンはそんな二人に構う事無く飲み干すと、「ふう」と息を吐いてベルに視線を向ける。

「これで、体もスタミナも万全だ。ここで途中退場なんて、認

めないぞ？ ベル」

「………… あんたつて奴は…………」

出来の悪い生徒を見る教師のような眼差まなざししで、ベルは頭を抱えて嘆息たんそくを吐き散らしたが、すぐに不敵な笑みを顔はに刷はいた。そうこなくつちや。それがベルの本心だった。

「狩場に来て、もう随分と時間が経過してるわ。ウエズの食料も、あたし達が来たせいでもう残り僅かになったし」

「………… それはお前ががつつくからだろ」ツツコミを忘れないウエズ。「 …… ともかく、残された時間は少ないわ。迅速じゅんそくに狩獵を終わらせましょう。………… ここで尻尾を巻いて逃げる訳には行かないわ。ハンターとして、じゃないわ。あたしの意志が、それ以外の道は無いと言ってるの。………… それでも、付いて来る者は？」

ベルが、質疑の形を取った確認を二人のハンターに差し向けた。フォアンは澄んだ微笑を浮かべ、ザレアは拳を固めて胸の前で構える。

やる気は充分。体力も取り戻した。意志も固まり、残りは 表
明の確認のみ。

ベルは不敵に笑み、立ち上がった。

「狩獵を始めましょう」

13・連続狩猟

夜の帳とばしに包まれた雪山は、風が雪を運ぶ音以外、無音の檻おりに閉ざされていた。

頂上から降りてくる凍えるような冷気を纏まとった風が吹き抜ける、雪原地帯。生物が棲すみつくには些ちかか環境が厳し過ぎる場所だが、ランプスの亜種であるギアノスや、牙獣種のブランゴは、人間にとつては厳し過ぎる環境の中でも、逞たくましく順応している。

だが、現在見える範囲にそういった小型のモンスターは影も形も映らない。生物の営いとなみが絶えた白い空間には、唯一ただつ、その巨軀きよくを誇示するように闊歩する、猪イノシシが存在していた。

大猪ドスファンゴ　その固体の中でも、現在雪山を闊歩している奴はキングサイズに分類される程の、圧迫される位の巨軀を有している。人のおよそ三倍近く在るだろうか。二つの大きな牙は、大人の胸の太さを軽く超えていた。まるで巨大な岩石が動いているような趣おもむきがある。

その巨軀を確認した三人は、横穴から飛び出し、フォアンを中心ちゆうしんに展開して行く。

まず、ベルがけむり玉をドスファンゴへ向かって投げつける。球体はドスファンゴの足許に落ちると破裂し、辺りに白煙を撒き散らす。一瞬にして、吹雪を超える白さが、辺りを静かに包み込む。

ドスファンゴにはそれが自然現象なのか、人為的に起こった現象なのか把握する術すべは無い。瞬またたく間に視界が白く塗り潰される中で、素早く蠢蠢く三人のハンターの姿が、白闇の中に紛まぎれる。

ドスファンゴの脇にまで接近したフォアンは、斧剣・ジャツジメントを抜き放ち、担かたぐような体勢で力を溜め込んでいく。限界にまで溜め込んだ力を放出すべく、一気に斧剣を振り下ろし、ドスファンゴの胸をぶった切る。

「どうるりやー！」と言う喊声かんせいが響き渡ると同時に、ドスファンゴ

の体から鮮血が噴出した。
「ブルフツ」とくぐもった呻き声が、牙に挟まれた口から発せられる。

突如として湧いた激痛に驚くドスファンゴだったが、その視界にはすぐさま脅威の許を映し出す事は出来なかった。困惑を伴った唸り声が両牙の間から湧く。

ざすっ、という擦過音と共に、幾つもの矢がドスファンゴの硬い皮を貫いていく。その度に傷口から火の手が上がり、大猪はあまりの激痛に体を悶絶させた。

視界に映らぬ脅威に、ドスファンゴはひとまずその場を脱しようとして、比較的速い動きで歩き出す。突進しようにも、場所に因っては断崖が広がっている雪原地帯である、視界の晴れぬ今、崖下に滑落してしまふ危険性があり、迂闊に走り出せない状況を作り出していた。

急いで別の雪原地帯に逃げ込む。そして、追ってくる脅威と、真つ向から対峙する。恐らくドスファンゴは、そんな計略を練っていたのかも知れない。だが、それは脅威に対してあまりに甘く見積もった計略だった。

ドスファンゴの体が動きを止める。足許から電流に似た痺れが駆け抜け、全身を一瞬にして束縛されたのだ。突然の事に、ドスファンゴは何が起こったのかわからない。体を動かそうにも、麻痺したように動かず、その場に縫いつけられたように固まってしまった。

それがシビレ畏と言う、獵人が考えた畏だと気づく事は、永遠に無いだろう。

シビレ畏の前に回り込んでいた、ネコの被り物のみを装備した少女が、回転式弾倉の拳銃の弾倉を象ったハンマーを手にして、ドスファンゴの眼前へと現れる。

一瞬、けむり玉が齎した白い煙幕が晴れ、その姿が露になったが、本来なら感じる事の無い感情が、ドスファンゴの中に降って湧いた。取るに足らない、捕食される物であるはずの人間が、今は何がどう

してか分からないが、
眼前に佇む、ハンマーを持っただけの少女が、堪らなく怖く、映
った。

「フォアン君の痛みを、思い知るのにや！」
振り上げたハンマーが、ドスファンゴの頭蓋骨を破碎するの
に、二撃目など必要無かった。

「……ザレア、フォアン。これはちょっと……やり過ぎじゃない？」
けむり玉の張った煙幕が晴れると、雪原に現れたのは、血塗れの
肉塊だった。

勿論、元はドスファンゴだった。だが今は、頭蓋は陥没し、牙は
破碎し、硬かったたであるう毛皮は鮮血に塗れ、納まっていた臓物は
撒き散らされ、鮮烈な光景を晒していた。ハンターとは言え、感情
を懐く人間には違いなibelにとって、流石に吐き気を誘われざる
を得ない光景だった。

「そんな事無いにや！ こいつは、フォアン君を吹っ飛ばした、酷
い奴にや！ 許す事は出来ないにや！」

「タダも同然で売られた喧嘩だ、言い値で買っただけさ。そういう
奴は、二度とそういう物を売れなくするんだ」

憤然と、或いは平然と言い放つ二人のハンターを見て、若干畏怖
に似た感情を懐かざるを得ないibel。

冷気とは別種の震えが体を駆け抜けたその時、ibelは頭上を見上
げてため息を漏らした。

「あの馬鹿……ここには来ないって、やっぱりガセじゃないのよ……
……！」

聞こえるのは、翼がはためく時の、風が殴られて発する唸り声。
夜の闇が敷き詰められた空に浮かぶのは、異形と呼べる白い塊。
言わずもがな 帯電飛竜・フルフル それが、雪原に舞い降

りるところだった。

三人はそれぞれに移動を開始し、ベルは刹那に矢を番え、着地する前に先制攻撃として、翼を射抜く。

ばすつ、と矢が翼膜を貫通すると同時に火の手が上がり、フルルの巨体が突然の攻撃で落下する。地鳴りがする程の衝撃が辺りを駆け抜けると、フォアンとザレアの二人が一気に震源へと接近する。フォアンは攻撃を溜め込む隙を見せる事はせず、すぐに斧剣を振り下ろし、フルフルの柔らかい皮を切り裂いた。斧剣の重量と、フォアンの臂力、そしてフルフルの皮が鱗や甲殻に守られていない事が重なり、あっさりと胴体が切り裂かれ、鮮血が裂傷から迸る。ただ、切り落とす事はできず、皮の弾力で跳ね返されて、少し後退を余儀無くされるフォアン。

まだ立ち上がらない内に、フォアンの反対側へと回り込んだザレアが、正式採用機械鎚を思いつき振り被り、横薙ぎに叩きつける。と、あまりに強烈な一撃により、フルフルの巨体が転がるようにして移動。胴体が思いつきり凹み、フルフルの口から透明な涎と共に、大量の血液が吐き出された。

フルフルもその時点になって咄嗟に全身に電気を身に纏い、それ以上の攻撃を強制的に中断させる。

が、それは二人のハンターに対して有効であるだけで、ベルにとっては何の脅威でもない。矢を番え、貫通する威力を込めて弦を引き、放つ。フルフルの胴を尻尾に掛けて貫通し、フルフルも堪らず踏鞴を踏む。

「ヴァオオオオウオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

怒りに任せた咆哮が、フルフルの長く伸びる首の先端から発せられる。バインドボイス。あまりに凶暴過ぎる咆哮に、ハンターは動く事すら許されない。だが、それはフルフルにとつても同じ。あくまでそれは、相手を地面に貼りつかせるだけの威力しかなく、それを行っている最中はモンスターも同様に動けない。

「ザレア、畏！」

咆哮が止むと同時に、ベルがザレアに檄を飛ばす。それを瞬時に汲み取ると、ザレアは道具袋の中から平べったい盤上の道具を取り出し、フルフルへ向かって急接近する。

その間にベルは同じく道具袋から角笛を取り出すと、それをすぐに口に当て、ハンターにとつては何とも感じない音色を、そしてモンスターにとつては非常に不快な旋律を響かせる。

フルフルが嗅覚に特化したモンスターとは言え、音が全く聞こえない訳ではない。ベルが掻き鳴らす不快な旋律を即座に聞き分けると、顔をそちらに向ける。すぐさま排除しようと、尻尾を白い地面に下ろすと、口許へと青白く発光する塊を向かわせる。

その間にザレアの接近を許してしまったフルフルは、まさか自身の足許に罠を仕掛けられているとは露知らず、突如として全身に走る電流に行動を拘束されても、何が起こったのか咄嗟には分からない状態だった。

「今にや、フォアン君！」

「おうとも、任せとけ」

フルフルの正面に立ち塞がり、斧剣を担いで力を溜め込み始める。その間にも、ベルは矢を番え、ザレアはハンマーを構えて、万が一への備えは怠らない。

「これで」「フォアンが溜めに溜めた力を、斧剣の先端へと全て注ぎ込み、全力を持って、フルフルの頭へと振り下ろす。」「終わりだ！」

フルフルの頭へと振り下ろされた斧剣は容易く首を断ち切り、刹那にしてフルフルを活動停止させる事に成功した。

……そうして、雪山の長い夜は、徐々に白んでいく

14・帰る場所

「ただいまー」

雪山での狩猟から、二週間が経過したラウト村に、一人の少年が訪れた。

褐色の防具　ティガレックスと言う名の飛竜の素材で造られた防具に身を包んだ少年は、元気そうな足取りでラウト村の敷居を跨ぐ。外に広がっている森と村の境界には、申し訳程度の門しかない。その前には、二人の少女のハンターが佇んでいた。

「お帰り、フォアン。その様子じゃ、特に問題は無かったみたいね？」

「フォアン君、お帰りなさいにや！　元気そうで何よりにや！」

私服姿の、長い紺の髪を流した少女は、ベル。普段着にもなっている、アイルーフェイク　にインナーのみの姿の少女は、ザレア。二人とも（一人はネコの被り物で分からないが）安心したような笑顔で、少年　フォアンを迎え入れた。

そう、あれから二週間が経過していた。

ウエズの安否を確認しに雪山へ赴き、ドスファンゴとフルフルを同時に狩猟すると言う体験をした三人は、その足でウエズを迎えに行くと、隣村へと送り、結局その日は隣村の宿で一泊する事になった。

その時、フォアンの体　ドスファンゴの突進と、フルフルの電撃をマトモに受けた体を、一度精密検査して貰った方がいい、とウエズに言われた。始めこそフォアンは渋っていたが、ウエズに無理矢理連れて行かれ、結局ラウト村に帰って来たのはベルとザレアの二人だけだった。ウエズは隣村での商売も適当に、大きな街へとフ

オアンを連れ去ったのだった。

そして、それから数日が経過し、フォアンから手紙で連絡が入って、遂に今日、ラウト村へ帰る事が許されたのだった。

「 凄く大変だったよ。何か、肋骨が折れてたらしいし、皮膚が炎症起こしてボロボロになるしで。医者に無理言っつて、今日退院させて貰った位だし」

フォアンが酒場へと向かう途中、愚痴のような言葉を零したが、その内容に思わずベルが嘖き出す。フォアンを怪訝そうな眼差しで見つめつつ、一応、普通の常識人としての反応を見せる。

「……あんだ、それってかなりヤバい状態なんじゃないの……？ 肋骨折れてるとか、どうしてそれに気づかなかったの……？ そんな酷い状態だったのに、二週間で退院とか、あんだどれだけ無理言っただの……？」

「入院なんて、暇人のする事さ。若者は動ける時に動くのが一番だよ」

「ジジイかあんたは！ しかもあんたの場合は動いちゃいけない時に動いてるんだよ！ 街に戻って養生してこい！！」

「まあまあ、堅い事言っつなよ。俺も見ての通り、ピンピンしてるんだからさ」

そう言っつて会心の笑みを浮かべるフォアンに、ベルは呆れを通り越して最早ため息すら出てこない様子で、頭を抱える。

「全くもう……何だっつてこいつはいつもこうなんだ……」

「それじゃ、フォアン君も、今日から一緒に狩猟に出掛ける事ができるにやねっ？」

ザレアが今の話を全く無視して、嬉しそうにはしゃぎ出す。

ベルは頭を抱えたまま、ツッコミを入れる事すら忘れて、呆然とザレアを見据える。

フォアンは顎を掴む素振りを見せて、小さく首肯する。

「そうだな。少しブランクもある事だし、軽い仕事ならすぐにも請けたい気分だぜ」

「それじゃあ、雪山草を摘んでくる依頼はどうかにや？ この前に行った村の村長さんが、是非に言ってきたのにや！」

そうなのである。二週間前、ウエズが音信不通になった事で、隣村ではちょっとした騒ぎがあったらしい。そんな折に三人のハンターが無事な姿のウエズを連れて来た事から、やたらと気に入られ、本来ならそのままアウト村へと帰ろうと考えていた三人が、そこで無理矢理一泊させられたのである。その後も、フォアンは街で検査を受けていたから知らないが、隣村から色んな依頼が舞い込み、ラウト村のハンターはテンヤワンヤだったのである。

「へえ、そうなんだ。じゃ、張り切って行くか」

「……ま、いいけどね。あんたが元気なら、それだけでもう満足よ、あたしも」

「それじゃ、早速行こうにや！ お祝いも兼ねて、雪山でポポも少し狩って行こうにや！」

三人のハンターは銘々（めいめい）に声を上げながら、酒場へと向かって行く。この後、二週間ぶりに帰って来たフォアンを村長が涙ながらに迎え入れたのは、また別の話。

今日もまた、彼らの狩猟の一日が始まるうとしていた……

14・帰る場所（後書き）

これにて【ベルの狩猟日記2】は完結です！

感想・評価、どしどしお待ちしておりますー（・ー・）ー

それではまたいつか、お逢い致しましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7615e/>

ベルの狩猟日記2

2010年10月8日12時54分発行